

論文

「震災の記憶」の変遷と展示

——復興記念館および東京都慰霊堂収蔵・関東大震災関係資料を中心に——

高野宏康

TAKANO Hiroyasu

はじめに

関東大震災についての展示施設である復興記念館（以下、記念館）には、多数の震災資料が展示されている。また、隣接する慰霊施設である東京都慰霊堂（以下、慰霊堂）の収蔵庫には、復興記念館に展示されていない資料が保管されている⁽¹⁾。これらの震災資料の一部は、一般市民からの公募によって蒐集されたもので、特定の蒐集者の意図だけでなく、いわば「自然に集まった資料」という特徴も持っている。また、その他に、帝都復興展覧会（1929年）をはじめとする、震災および震災後の「帝都復興」事業に関するいくつかの展覧会の出品物のうち、展覧会の終了後に寄贈されたものも含まれており、震災被害者をはじめ、復興事業を担った東京市などの公共諸団体、展覧会に出品した学術団体や諸会社など、当時のさまざまな立場の人々の、多様な「震災の記憶」が集積された資料群となっている。

記念館およびその展示資料については、震災の記念物を保管し後世に伝えていくことに関する共通理解（公論）の場の形成過程に着目した山本唯人の研究がある⁽²⁾。また、記念館の絵画の歴史表象のあり方については寺田匡宏の研究がある⁽³⁾。慰霊堂保管資料については、2006（平成18）年以降、神奈川大学が調査を実施してきた⁽⁴⁾。その成果に基づき、写真資料については北原糸子が内容の紹介と分析を行い、震災記念物および大型展示パネル以外の資料については拙稿で調査成果をまとめ、資料リストを作成した。残りの未調査資料については、2009（平成21）年10月から、朝日新聞文化財団の文化財保護助成事業として、関東大震災資料調査会が調査・整理・保存およびデータベース化作業を実施中である⁽⁵⁾。しかし、個々の展示資料の変遷過程や、それらが両施設に寄贈される以前の展覧会との関係など、時代状況のなかで関東大震災および「帝都復興」の記憶が集積した両施設がどのような意義を持ち、時代とともにどのように変遷していったのかなどについては、ほとんど明らかになっていない状況である⁽⁶⁾。

関東大震災をめぐる「記憶」は、新聞報道や雑誌、書籍、絵画や写真、映像、そして記念碑や記念館に展示された震災記念物などのさまざまなメディアによって表象され、時代の変遷とともに作りかえられてきた。また、伝える側と受け取る側の立場や関心によって「記憶」は多様に表現されてきた。被災者およびその関係者、救済活動や被害調査を実施した行政機関をはじめとする各種団体、研究者、作家、ジャーナリストなどがそれぞれの立場・関心から震災を叙述し、その「実態」を描き出す一方、その過程で、朝鮮人虐殺事件をはじめとする「記憶」の隠蔽や忘却が起こったことは周知の

とおりである。隠蔽や忘却とともに、「震災の記憶」は、「帝都復興」や「防空」「防災」といった、その時代状況に対応した意義を付与され、震災をめぐる叙述はいつしか表層的には「国民の物語」に回収されていくこととなった。本稿が「震災の記憶」という表現を使用する理由は、表層的にはそのような「国民の物語」が震災の歴史（＝正史）として支配的言説となっていたことを認識しつつも、そもそも多様であった震災表象のあり方とその変容過程を明らかにしていくことが重要であると考⁽⁷⁾えているためである。

「震災の記憶」の問題を考える場合、記念館と慰霊堂が、関東大震災についての唯一の公的な記憶装置として特権的な位置を占めていることは大きな意味を持つ。震災で被害を受けた各地域には慰霊碑が残されている場合や、震災記念日である9月1日には慰霊法要が行われるところもあるが、慰霊・展示施設は存在せず、基本的に公的な「震災の記憶」は記念館と慰霊堂に統合されていった。しかし、単なる公共施設ではなく、その成立過程では、建設事業の主体のあり方、施設の性格・構成、デザインなどをめぐって紆余曲折を辿っている。また、収蔵物の蒐集過程、展示内容およびその変遷についても、「震災の悲惨さ」や、「帝都復興」の記念、「防災の教訓」など、関心のあり方は時期によって微妙に異なり、必ずしも一貫していたわけではない。さらに、戦後、東京大空襲の死者の慰霊・展示施設を兼ねることになったことや、近年では阪神・淡路大震災の写真パネルが記念館に展示されるなどの変化が起こっている。つまり、両施設は「震災の記憶」についての唯一の公的な記憶装置でありながら、さまざまな「ゆらぎ」が含まれているという特徴を持っているのである。

本稿の課題は、「震災の記憶」のあり方とその変遷について、上記のような特徴を持つ記念館と慰霊堂に焦点をあてて考察することである。具体的には、①その成立過程、②収蔵物の蒐集過程、③両施設の収蔵物の出品元である震災関連展覧会の特徴を検討し、現在までの両施設およびその収蔵物の変遷を、時代状況との関連で分析を行う。以上の考察によって、記念館・慰霊堂の持つ意義にとどまらず、これまで、それぞれの研究分野ごとに異なる位置づけ・評価がなされつつも、結論としてはのちの「戦争」へと至る過程もしくは前段階として見なされがちな関東大震災およびその後の復興期の位置づけを再検討していくことにもつながっていくのではないかと考⁽⁸⁾えている。

なお、巻末に、展示物の変遷過程を記載した記念館展示資料リストを添付したので、適宜参照していただきたい。現在、記念館については、展示物の配置概要を示した平面図（2009年9月作成、12月改訂）とパンフレットがあるが、展示物の目録や図録は存在しないため、リストの作成は本稿が最初である。

I 慰霊堂と記念館の成立過程——「復興」をめぐる社会意識との関連から——

両施設の成立過程については、東京震災記念事業協会の報告書である『被服廠跡——東京震災記念事業協会事業報告』（1932年。以下、『被服廠跡』）に記述があり、事実関係や経緯はある程度知られている。前述の研究論文や、概説書（加藤ほか、2009年）も同書に依拠しているが、その意義についての考察は充分なされていない。本章では、両施設の建設案をめぐる様々な試行錯誤や、設計案募集で当選した案に対して批判が起こったことに着目して、震災後の「復興」をめぐる社会意識との関連から両施設の成立過程を再検討してみたい。

まず、震災後、被服廠跡に「震災記念堂」の建設が決定するまでの経緯を整理しておくことにする。⁽⁹⁾ 震災当日、被服廠跡に避難した人々を襲った火災旋風により約3万8千人の死者を出した翌日、9月2日の朝、学校用地付近の小高い場所に日蓮宗の僧侶が祭壇を設置して回向を行った。これが被服廠跡に設置された最初の供養施設である。その後、10月に仮納骨堂の建設が着手され、同月19日には東京市主催の四十九日の追悼会が開催された後、この地に納骨堂を兼ねた記念堂施設を建設する案が浮上した。具体的にどのような施設を建造するかについては当初から議論があり、「一面墓地に非ざる地に一大墳墓又は納骨堂を作ることの可否」、「記念堂と納骨堂を合併するか、又は分離するか」、「分離するとせば遺骨は多摩墓地に、記念堂は被服廠跡へ置くべきこと」などが問題となった（『被服廠跡』、12頁。以下、同書からの引用は頁数のみ記載）。

東京市が検討を重ねた結果、同年の12月、東京市公園課を中心として、被服廠跡に震災の記念建造物を建設することが協議され、原案の作成を開始した。建設構想の骨子三点はその後も基本的に継承されている。一点目は、大震災を永く記念し、天災の恐ろしさを忘れない心掛けをもつこと（防災）、二点目は、犠牲者の納骨堂を建造し永久に弔祭すること（慰霊）、そして三点目が、「平素は又社会教化的機関にも利用し得ることとし、建物内には、震災を記念する絵画彫刻を掲げ震災記念品を蒐集陳列し以て震災記念館」（13頁）とすることであった（展示）。当初から、慰霊施設と展示施設は一体となっており、震災記念建造物は単に震災を記念し犠牲者の弔祭を行う場所というだけでなく、「社会教化」の機関として「防災」「慰霊」「展示」の要素を合わせもった施設として構想されていたことがわかる。

注目すべきなのは、この建設案に対して「反対論」があったことである（12頁）。その論旨は、悲惨な災害があった場所に遺骨を埋葬することは「余りに強い刺激」を与え、「返つて人々に恐怖の念を興へて復興の鋭気を殺ぐ」（傍線は筆者、以下同じ）ため、遺骨は多摩墓地など他の適切な場所に埋葬する、というものである。東京市が協議した結果、上記の構想のとおり実現されることとなったが、「震災記念堂」建設事業は、「東京市なる一役所の事業となすには余りに重大な意義をもつ」もので、「東京市が中心となつて、幸に難を免れた全市民、並に一般同情者の熱烈なる誠心と、其の浄財を以て建設することが最も有意義」であるとして、東京市の事業とはせずに、別の機関を設置する案が出された。当時市長であった永田秀次郎は、この案に賛同し、1924（大正13）年2月、「震災記念堂」の建設に関する調査研究を正式に命じ、「参考資料」の蒐集に着手した。⁽¹⁰⁾ 同年5月、この案は東京市議会で賛同を得て、「財団法人東京震災記念事業協会」を設立することが決定した（13頁）。

以上の経緯で重要なのは、まず、当初の建設案に盛り込まれた3要素のうち、被服廠跡に遺骨を埋葬するという「慰霊」の要素が、「復興」を妨げる懸念が指摘されていたことである。のちに「慰霊」と並んで強調されることになる「復興」は、3要素に含まれていなかったことも指摘しておきたい。また、「一般同情者の熱烈なる誠心」を受け、事業主体が東京市ではなく、別機関を設置することになったことも重要である。これらの点から、震災後まもない当時、さまざまな要素が混在する「震災の記憶」にどのような表現を与えるかをめぐって、要素としての「慰霊」と「復興」、主体としての「官」と「民」がせめぎあっていたことがわかる。

次に、震災後、さかんに主張された「復興」をめぐる社会意識と、「震災記念堂」建設事業との関連について検討しておきたい。震災後まもなく、様々なメディアで「帝都復興」が主張されるように

なった。新聞には、「帝都復興と遷都論」(大阪朝日新聞, 9月9日付), 「帝都復興審議 市会第三回協議会」(東京朝日新聞, 同月13日付)と題した見出しの記事が連日掲載され、行政のさまざまな復興計画⁽¹¹⁾について報道した。同月12日には、「帝都復興に関する詔書」が出されている。

当時主張された「復興」をめぐる言説の特徴は、震災で崩壊した「帝都」の建築物や各種施設などを合理的で近代的な都市計画⁽¹²⁾によって物理的に「復興」を実現させ、国家の発展を目指すという側面についてだけでなく、精神的側面の変革の実現という要素も含まれていたことである。このことは、「復旧」でなく理想的なニュアンスを含めて「復興」という表現が強調されたことからもうかがえる。また、重要なのは、これらの「復興」についての言説には、震災以前、大正初期の第一次大戦の影響による好景気およびその影響による社会の変化とその負の側面に対する批判や反省の意識が含まれていたことである。震災を「軽佻浮薄」な意識に対する「天」からの戒めとみなし、生活の改善を主張する「天譴論」⁽¹³⁾は、同様の意識に基づく典型的な言説である。前述のとおり、「復興」論が話題にのぼっていた時期に、「震災記念堂」建設案が議論されていたのであり、この事業にも当時の「復興」をめぐる言説が影響を与えていた。

そのことを明確に示す一例として、ここでは、大仏建立案を挙げておく。東京市が「震災記念堂」案を議論していた1923(大正12)年10月、のちに東京震災記念事業協会の顧問となる渋沢栄一の元へ、「被服廠惨害地始末意見書」⁽¹⁵⁾が送付されている。その内容は、発起人総代の渡邊長男という人物が被服廠跡に大仏を建立する案を主張するもので、大仏の図面も添付されている。そこでは、「近時の世相」を「専ら物質文明に傾き」「精神的の教養を閑却せり」「人心の不安は漸く悪思想に馴致し、良俗を害し道義を乱し、風致は日々衰ふ」とし、震災の被害について「今回の惨禍も正さに尊天の呵責」で「幾万の惨死は是れ又悪行の犠牲にあらずして何をや」と、「天譴論」的な認識を展開している。続けて、この状況から立ち直るためには、「官民一致全力を傾注し国家社稷の為」、被服廠跡に大仏を建立するようにと主張を展開し、大仏について具体的に説明を加えている。それによれば、大仏の大きさは「九丈五尺」、犠牲者の「遺骨ヲ以テ作製シタル釈尊仏」であり、大仏は「極メテ雄大ニシテ現代芸術ノ代表作」とし、「世界万邦ヲシテ日本人士ノ信念ヲ知ラシメ其偉大ノ芸術ハ将ニ観光ノ外客ヲ誘致」し、「帝都復興ノ期ヲ促進」するという。以上のように、「帝都復興」事業を象徴する近代的な都市計画とは対極的と思われる構想が述べられているが、ここでも「帝都復興」という表現を使用して主張が展開されていることに注目しておきたい。

「震災記念堂」⁽¹⁶⁾の原案は、1924(大正13)年5月に発表された(91-92頁)。「計画概要」では3要素のうち、犠牲者の追悼とともに、「社会的教化機関」であることもうたわれているが、ここでは「防災」要素はみられなくなっている。「施設概要」によれば、中央に「一大記念堂」を設置、周囲は公園、記念堂は約五百坪の野外祭場的建造物で、中心部には祭壇・演壇として使用する八角堂を設置し、その左右から円形に回廊をめぐらし、内部には約千人収容の座席がつけられるという内容であった。建築様式は「奈良朝時代」とし「其の局部手法に於て大正時代を現はさんとす」となっている。⁽¹⁷⁾回廊は展示スペースとなっており、絵画や図表などを展示、中央祭壇の後部に霊体を奉安し、その地下室を納骨堂とするものであった。この案は結局頓挫することになったが、その理由として、東京市が費用を負担することが不可能と判断されたことが挙げられている。このことが新たな事業団体(東京震災記念事業協会)を設置し、寄付金を募集して建設事業にあたることになった一因であったとさ

れている（13頁）。

東京市の原案が実現しなかったことで、1924（大正13）年12月、設計案を一般から懸賞によって募集することになった（95-102頁）。応募期間は翌年の2月28日までの約3ヶ月間、発表は同年3月。審査員は、岡田忠彦（東京震災記念事業協会理事）、塚本靖（工学博士）、伊東忠太（工学博士）、正木直彦（東京美術学校校長）、佐藤功一（工学博士）、佐野利器（工学博士）、井下清（東京市公園課長）の7名であった。懸賞締切までに応募件数は220点に達し、1925（大正14）年3月7日、帝国鉄道協会で第一回の審査会を開催、同月14日に第二回の審査会を開催し、一等・二等各1名、三等3名、選外3名の当選者を発表した⁽¹⁸⁾。

前田健二郎による一等当選案は、中央に円塔を設置、その内部に「白大理石」で霊体を配し、周囲には11本の「黒大理石」の巨柱をめぐらせ、「天井は円蓋としてステンド硝子を通じて上部より光線を受け礼拝場より霊体を拝すれば頂上を淡く輝り出されて神秘的感じを起こせしむ」とあるように、基本的に「日本風」の要素が皆無で、「モダン」なデザインとなっているという特徴があった。この点は他の当選作も同様であった（三等当選案の一つのみ寺院風）。モダニズム様式に批判的なことで知られる伊東忠太が選者の一人であったにもかかわらず、このような選考結果となったのは興味深い⁽¹⁹⁾。なお、これらの当選案は、同年3月21日から23日までの三日間、上野恩賜公園内東京市自治会館で、展覧会を開催して一般に公開されている。

一等当選案に基づいて建設されることになっていたが、3月27日新聞紙上に設計案が模倣であることを指摘する投稿が掲載されたため、調査を実施することになった。その結果、多少の類似点が見られるものの、問題視されるようなものではないことが判明し、同年9月1日に震災三周年にあって地鎮祭を挙げる事となったが、翌1926（大正15）年4月30日に、仏教連合会から設計変更の建議書が提出された（103頁）。この建議書では、建築物は「吊霊」と「社会教化」の機関であるべきにもかかわらず、発表図案は「外観様式に於て其趣旨の表現を認むる能はざるのみならず、祭場狹溢にして市民的吊祭りの儀礼執行不能且つ教化機関としての施設を閑却せり」とし、「市民多数の期待に副はざるもの」と批判されている。また、『被服廠跡』の記述では、現在の設計は「全然西洋建築の模倣」で「国民固有の思想信仰を顧慮せざるもの」で、建築物は「現代を表徴すると共に民族固有の精神的文化を折衷採納されうゝを適度と信ず」と補足して要旨をまとめている。さらに、9月13日には本所区会協議会からも同様の陳情書があった。以上から、設計案に対する批判は、この時期の建築様式の流行に影響された当選案の「モダン」な外観が「国民総意」に適合していない点に集中していたことがわかる。

批判を受けたことで、1926（大正15）12月、東京震災記念事業協会は設計の変更を決定し、懸賞審査員であった伊東忠太、佐野利器、塚本靖、佐藤功一に再設計を囑託し、新たに設計をやり直すこととなった。その結果、伊東が執筆した略設計が提出され、翌年7月8日に新設計の概要を発表した。「東京震災記念堂設計説明」によれば、様式は「純日本風建築なるも、徒に古来の形式を踏襲せず自ら新味を加へたるもの」と説明されている。「純日本風⁽²⁰⁾」という表現は、懸賞当選案への批判を意識したものであろうが、塔部にはインドのストゥーパを思わせるデザインが施されるなど、「純日本風」とは言い難い。また堂部もキリスト教教会のバシリカ式礼拝堂を思わせ、およそ「純日本風」とは言えない設計となっているが、この設計案に対する批判については特に言及されておらず、基本

的に好意的に受け入れられたと思われる。現在と異なるのは、当初の設計案では堂両翼が陳列室となっていることである。⁽²¹⁾

1927（昭和2）年11月25日に新設計案が決定し起工式を開催したが、この時の祭文にも、祭祀は「我国固有ノ美風」という「純日本風」を強調した表現がみられることに注意しておきたい（123頁）。その後、1928（昭和3）年6月7日に工事着手、1929（昭和4）年同日には上棟式が行われ、1930（昭和5）年2月には建造物の正式名称が「震災記念堂」に決定した。これ以前は、被服廠跡の記念建造物は「被服廠供養塔」という呼称で呼ばれていたことが、慰霊堂収蔵庫保管資料の寄付金募集ポスターからうかがえる。⁽²²⁾

次に、設計方針について、設計者の伊東自身がどのように考えていたのかを検討しておく。⁽²³⁾ 伊東によれば、懸賞当選案が廃案となり、自分に「純日本式の建築の立案」が依頼されたという。依頼を受けた後、伊東が問題としたのは、まず「材料構造」と様式の関係で、鉄筋コンクリートと木材建築をいかに両立するかであった。また、「概観内容の善美」が「重大問題」であった。震災記念建造物は、震災の死者の霊を祀り祭典を行う場所である以上、「宗教的威儀を保ち、浮華に陥らず、粗野に流れず、而して森厳なる気分の漂うもの」、すなわち「精神的実用」でなくてはならないとする。伊東によれば、それは「日本古来の社寺の様式に由るより外にはその道が無い」が、それを鉄筋コンクリートで造ることは「決して不都合でも不合理でもない」という。また、「細部の手法には必ずしも古式を踏襲せずして随所に新案を試むる」としており、「純日本風」としつつ、積極的に新たな意匠を盛り込むことを可能にする設計方針をとっている。⁽²⁴⁾ 「塔の相輪」やさまざまな妖怪、怪物の装飾にはその設計方針が明確に表現されている。

伊東は「塔の相輪」の様式は「全く予の独創」で「支那及び印度の塔から暗示を得た」が「何れの实例にも模倣しておらぬ」ものであるという。⁽²⁵⁾ 一般的に日本の塔の相輪は、心柱の上部が屋上に露出したところに九輪をつけているが、記念堂の塔には心柱がないためこの趣向は「無意味」であるとし、インドのストゥーパを思わせるデザインを採用している。このような独自のデザインについて、伊東は「善悪可否は観る人の直感に訴へるより外はない」、「或る人は予にこの建築は日本の何時代の様式かと問ふたが、之に答へることは甚だ迷惑である」「強いて言へば現代若くは昭和時代とでも言わねばならない」といっている。また、細部の装飾に妖怪や怪獣のデザインを採用したことについて、「多数の人に面白いと認められて居る様である」とし、「一見滑稽なる遊戯を試みたかの如くであるが、予の心事には毫も遊戯的な気分は無く、最も緊張した真剣味を以て考案したのであることを承認されたい」と強調している。⁽²⁶⁾ 懸賞当選案が批判にさらされ、「純日本風」のデザインを求められたという背景があるが、伊東自身の認識および実際の設計案は、表面的な「純日本風」のもと、かなり伊東なりに当時の風潮を意識した上で、「震災の記憶」の表現として工夫を凝らされたものであったといえよう。⁽²⁷⁾

1929（昭和4）年9月、帝都復興展覧会が開催されると、その出品物を「永遠に陳列保存」すべきであるという「輿論」が高まったため、東京市および東京市政調査会、東京震災記念事業協会が協議し、主要出品物は東京市本所公会堂内に保管されることになった。また、「幾多の思い出き資料は記念堂内に設けられた小規模の陳列室では到底之を充すに由なき程数多くのものがあった」ため、同年11月9日、「震災記念堂」内に設備せんとした陳列室の計画を変更し、展示施設を建設することが

決定した(203頁)。1930(昭和5)年9月26日に起工、翌年3月に東京市はこの施設の名称を「復興記念館」に決定、同年4月17日に建物が竣工した。陳列作業は、同年7月4日の皇后巡啓に合わせて完了し、同年8月18日に開館した。その時点をもって、東京震災記念事業協会は解散し、東京市が事業を引き継いだ。設計者の個人名は竣工記録には明記されておらず、東京震災記念事業協会となっているが、慰霊堂の設計者が伊東忠太であり、記念館の着工時まで同協会の建築顧問をつとめていたこと、同協会の建築関係の技師として萩原孝一の名前があがっていたことから、伊東の示唆や指導のもとで萩原が図面を作成したと考えられる⁽²⁸⁾。

「計画案」によると、「陳列材料」は約1000点で、そのうち「震災記念資料」は約500点、「復興記念資料」は約500点と、ちょうど半分ずつの割合で陳列することになっている(208頁)。後述するようにこの割合は必ずしも計画案のとおりにはならなかった。記念館の位置づけは、「震災記念堂の附帯別館」であり、「大正大震災火災の被害を記念する物品、其状況を後世に伝ふべき絵画、写真、統計等を整理陳列した小博物館」であると同時に、「地震火災に関する諸種資料の陳列によって災害に対する不断の準備と、其予防知識を普及」するとなっている。「展示」要素とともに、懸賞募集の際には見られなくなっていた「防災」要素が再度盛り込まれたことがわかる。「慰霊」要素である「震災記念堂」と合わせて、震災復興の記念施設とすることが意図されていたのである。

次に、両施設のデザインが、当時の時代状況のなかでどのような意味を持っていたのかについて検討してみたい⁽²⁹⁾。慰霊堂の外観は、瓦屋根葺であることなど基本的に「和風」のデザインとなっているが、日本的なデザインを求める当時の風潮に沿ったものであり、過去の建築様式を自由にアレンジしながら、新たな方法で伝統を表現しようとしたものであるといえる。記念館の外観は、スクラッチタイルで、表面に凹凸をつけて秩序を生み出しながら、記念性を表現している。このスクラッチタイルは、帝都復興展覧会の会場となった東京市政会館(1929年竣工)の外壁にも使用されており、当時の建築意匠の流行がうかがえる。

また屋根の瓦葺の短い軒は、「和風」の慰霊堂との対応を意識したものと考えられる。このような構成は、内部の玄関ホールや階段室・2階中央展示室とともに昭和初期のデザインの特徴を示している。同様のデザインは1930(昭和5)年の大札記念京都美術館コンペの当選案にもみられる⁽³⁰⁾。慰霊堂と記念館の場合、鐘楼などの周辺施設、所在地である横網町公園もふくめ、一連の施設がすべて関東大震災の記憶を保存し後世に伝えるという目的をもってデザインされていることが他に類例をみない特徴となっている。伊東忠太の特徴である妖怪や怪物の意匠、東洋と西洋を融合させたデザインは、異彩を放っているようにも思われるが、当時、懸賞当選案に向けられたような批判は起こらず、結果的に「純日本風」として受け入れられた。「モダン」な意匠が過度に強調されたデザインには批判が起こり、妖怪や怪物といった異彩を放つ意匠であっても、「伝統」と「モダン」、東洋と西洋を融合したデザインが採用されたことは、当時の「震災の記憶」の表現をめぐる社会意識のあり方の特徴といえよう。

一方、この時代の社会意識は、震災六周年である1929(昭和4)年の震災記念日における東京市長堀切善次郎の告諭にみられるように、「精神の緊張」を促すものでもあった(東京朝日新聞、同年9月1日付。以下、東京朝日と表記)。堀切市長は、「今日の記念日を迎ふるに当り各位と共に更に精神を緊張し軽てう浮華を戒め勤儉力行を事として益々帝都の興隆を計りたい」とし、「震災の記憶」を

引き合いに出し、当時の風潮を批判している。また、震災後間もない頃から、禁酒運動など「精神の緊張」を求める様々な活動が展開されていた。禁酒運動は、1926（大正15）年の震災記念日から開始され、以後毎年開催されるようになっており、1929（昭和4）年には賀川豊彦作の行進曲「酒なし日行進歌」を歌いながら行進する様子が「酒なしデー大示威」という見出しで報じられている（東京朝日、同年9月1日）。また、前述の堀切市長の告諭があった同日には、カフェ撲滅運動も展開し、「カフェー亡国」のピラ3万枚を「全市要所」で配布し、銀座や浅草路で街頭演説を行い、「市民の覚醒」を促している（東京朝日夕刊、同日付）。このような風潮は、のちの戦時体制の文化統制に展開していく側面を持っているといえよう。このような風潮は政治的には満州事変（1931年）や日中戦争（1937年）が契機として強調されていく傾向があるが、震災復興期にすでに存在していたことがわかる。

ただ、当時の風潮は必ずしも単純に「復古」や「国粹」、「精神」主義の要素だけを持っていただけではない。1931（昭和6）年の震災記念日に新聞紙上に掲載された斎藤実の講演「新興国民の気力」では以下のような主張が展開されている（東京朝日、同年9月1日付）。関東大震災の後、「見るかげもなかった焼土の上にはあらゆる近代文化の精粹を集めた大建築を初め、道路、橋梁、給水、通信運輸、消防等の設備に至るまで見事に完成をつけて、復興の名に恥じない大都市を再建致しました」と「帝都復興」事業の成果を讃えている。そして、「我等固有の精神たる共同生活の本義に立ち返り、進んで合理的な生活規範を確立して産業振興の根幹たらしめ、現代文化の精神を探つてこれを我が建国精神の上に築き健全なる社会進化」を「我等全国民の協力によつてなし遂げなければならない」と主張している。実線部は「帝都復興」事業や「合理的な生活規範」「産業振興」などの「近代」的な価値観を示しており、点線部は「国粹」「精神」主義的な価値観をそれぞれ表明していると考えられる。斎藤の意図は、その2つの要素の融合を目指していたと考えられよう。

佐藤美弥は、震災後の言説に類出する「此際！」という表現に着目して、この時期の社会意識の特徴として、「資本主義の矛盾や既存の社会に対する反省・批判の意識を背景として、変革・改善への欲求」が込められており、それらに「簡素化、科学化を価値とする傾向」があったことを指摘している⁽³¹⁾。この指摘は、震災記念日の禁酒運動や、「精神の緊張」を促す堀切市長の講演、斎藤実の講演、先に検討した震災記念堂の設計をめぐる試行錯誤にも共通するといえる。重要なのは、禁酒運動を「精神」主義、「帝都復興」事業を「近代」主義と切り分けて考えてしまうと震災後の社会意識のあり方を単純化してしまうことになり、その本質をとらえそこなってしまうということである。モダンに特化したデザインが批判され、「融合」をはかった伊東忠太のデザインが採用されたこと、そして、斎藤の主張にみられる「帝都復興」事業などの「近代」主義と、禁酒運動などの「精神」主義の「融合」が目指されていたことが、この時期の社会意識の特徴と考えられるのである。

II 震災資料の蒐集

次に、慰霊堂と記念館に収蔵された震災資料の蒐集過程および、それらが実際に展示された震災関連展覧会について検討する。蒐集過程については『被服廠跡』に概要が記載されているが（212-221頁）、各種展覧会との関連についてはあまり言及されていない。そこで、展示終了後に出品物が両施

設に寄贈された3つの震災関連展覧会（震災復興展覧会：1924年、帝都復興展覧会：1929年、天覧展示：1930年）について、まず、本章では蒐集方針・状況を検討し、次章で、各展示の特徴を明らかにしていくことにしたい。⁽³²⁾

被服廠跡に建設されることになった「震災記念堂」は、犠牲者の慰霊と供養だけでなく、「社会教化」のため、震災記念品の展示施設を兼ねることになっており、当初から震災資料の蒐集に取り組むことが予定されていた。実際に震災資料の蒐集を正式に開始したのは、前章で述べたとおり、1924（大正13）年2月、「震災記念堂」の建設案が了承され、当時の東京市長永田秀次郎が調査研究を正式に命じた際である。この時、どのような資料がどの程度蒐集されたのかは資料が残されていないため不明である。改めて蒐集を実施する契機となったのは、東京震災記念事業協会が発足した後、震災一周年記念として同年9月、東京市主催により、上野の東京自治会館で震災復興展覧会が開催されたことである。

震災復興展覧会の開催にあたって、東京市長の永田秀次郎は、各種公共団体、学校や会社などに出品依頼状を送っている（213頁）。永田は、震災一周年を記念して展覧会を開催することになったことを述べた後、今回の展覧会の特徴について以下のような主張を展開している。まず、火山の噴火によって消滅した古代ローマ時代の都市ポンペイの例をあげ、「ポンペイ市が余儀なく自然的記念物を残すに止まった憾みに鑑み」とし、今回の展覧会にあたって東京市民は「科学的に積極的につまり絢爛たる故文化を弔ふに充分なる記念物を持寄つてお互いに教育的感銘を深からしめ且又後見人の印象と研究とを補助したい」という。続けて永田は、「世界を驚かすべき能率を以て復興しつつある現東京市に少なくとも現代科学と永年の経験とを提供し所謂復興参考資料としていただく必要を感じた」と述べている。つまり、永田によれば、ポンペイは突然の噴火のため「自然的記念物」しか後世に残せなかったが、東京市民は、「科学的」かつ「積極的」に記念物を持ち寄り、驚くべき速度で復興しつつある東京に「現代科学」と「永年の経験」を提供したいというのである。ここで永田が、「科学」という表現を強調していることは震災後の「復興」意識を考える上で重要である。

震災復興展覧会の終了後、東京震災記念事業協会はすぐにその出品台帳を参照し、その所有者に書面を送り、また職員を派遣して出品物の蒐集に尽力した。しかし、出品者の多くはバラック居住者など、住居を転々とするものが多かったようで、出品物は思うように集まらなかったようである。そこで、同協会は「徹底的宣伝」を行うことにし、当時の会長西久保弘道は、1927（昭和2）年5月3日、都下の主要新聞社に現状を述べ、出品物を募集した。また、電車内には同日から3日間ポスター広告を掲示し、各区役所および各町会にも募集依頼を行い、さらに同会職員は、帝大図書館、主要デパート、丸善などを訪ね、依頼するという徹底ぶりであった。⁽³³⁾ 募集期間は同年6月末日まで、選考は8月末日までに行い、採否を通知することになっていた。

注意しておきたいのは、ここでの「依頼」の募集対象が「記念物品」と「絵画資料」に分類されており、後のように「復興資料」は含まれていないことである。「絵画資料」は、「記述文ニシテ絵画作成資料タリ得ルモノ」も対象となっており、採用者には蒐集した資料の冊子を贈呈されることになっていた。また、「記念物品」の寄贈者は東京震災記念事業協会の会員となることが記載されており、出品物を募るためのさまざまな工夫が凝らされていたことがわかる。「絵画資料」は、募集だけでなく購入にも積極的だったようである（218頁）。その一例として、後藤新平からの推薦で徳永柳洲の

震災記念絵画 25 枚を小島うめという人物から購入し、洋画家の田代二見からは震災直後の状況を写生した油絵 50 枚を購入したという記述がみられる。⁽³⁴⁾

以上のように、東京震災記念事業協会が展示品の蒐集に尽力するなか、1929（昭和 4）年 9 月、東京市政調査会主催の帝都復興展覧会が開催された。この展覧会についての内容および特徴については後述するが、東京震災記念事業協会は、この展覧会の開催を好機と考え、展覧会の終了後、同年 11 月 9 日付で出品物を募集する書面を各方面に送付した。この書面では、帝都復興展覧会の出品物について、「保存方法ニ付キテハ目下東京市ニ於テ考究中」としつつ、「不取敢財団法人東京震災記念事業協会ニ於テ建造中ニ係ル東京震災記念堂内ニ保存陳列ノ方法ヲ以テ何卒御支障ナキ限り御出品一部ハ閉会ト同時ニ同協会へ御寄贈若ハ保管御委託被成下候様御承諾相願度得貴意候」とし、出品物を震災記念堂に寄贈することを依頼した（219 頁）。その結果、帝都復興展覧会の主要出品物を 610 点蒐集することができた。同展覧会の総出品点数は約 7 万点にもものぼるため、ごくわずかではあるが（出品物の約 0.087%）、「震災記念堂」に寄贈されたことがわかる。これらと、1924（大正 13）年 2 月の蒐集開始から帝都復興展覧会開催に際しての募集以前の約 5 年半の間に蒐集された 605 点と合わせて、1215 点の出品物が集まったことになる。蒐集物全体の半数近くが帝都復興展覧会の出品物であり、同展覧会の影響が大きかったことがわかる。⁽³⁵⁾

その後、1931（昭和 6）年 4 月 17 日、復興記念館の建設がほぼ完成したことにより、東京震災記念事業協会は再度、改めて「震災記念物」と「復興記念資料」の募集を行った。ポスターを市電内に掲載し、一般の人々に寄贈および出品を積極的に呼び掛けた結果、募集期限の同年 6 月 30 日までに新たに 801 点蒐集することができ、総計で 2016 点となった。⁽³⁶⁾これが記念館開館時点での蒐集物の総数であり、『被服廠跡』にリストが掲載されている（221-303 頁）。これらの蒐集品は一旦、本所公会堂に集められたのち、展示作業は同年 5 月から開始された。同年 7 月 4 日に皇后の巡啓に合わせて取り急ぎ仮展示を完了させ、その後に改めて全体の展示が完成した。『被服廠跡』掲載リストでは、蒐集品は、「震災記念品」と「復興資料」に分類され、それぞれ 933 点、1083 点となっている。⁽³⁷⁾この割合はほぼ計画案どおりである。記念館の完成後も蒐集は継続し、多数の震災資料が同館に集まっていた。

以上から、震災資料の蒐集は、「震災記念堂」の建設計画当初から構想されており、震災関連展覧会の開催時に大々的に募集されていたこと、そして、東京市長の永田の主張に見られるように、「科学的」かつ「積極的」に震災資料の蒐集が意識的に行われていたことがわかる。また、「震災記念物」と「復興資料」の 2 つのカテゴリーによる蒐集方針は当初から一貫していたわけではなく、明確になったのは帝都復興祭後の蒐集時であること。蒐集は当初思うように集まらず、復興記念館開館時まで集まった蒐集物の約半数が帝都復興展覧会の出品物であり、同展覧会の影響が強かったことが確認できた。次に、これらの点をふまえ、終了後に出品物が記念館に收藏された各種の震災関連展覧会の特徴について考察を行うことにする。

Ⅲ 展覧会で表現された「震災の記憶」

① 震災復興展覧会（1924年）

この展覧会は、震災一周年記念展覧会として開催された。主催は東京市であり、「公的」な性格を持った最初の震災関連展覧会という性格を持っている。この展覧会については、①『被服廠跡』の記述（212頁）と、②東京朝日新聞9月1日付の記事（展示内容、出品物の一部などが記載）、③出品募集のポスター（現在、記念館に展示中）⁽³⁸⁾以外、まとまった資料や出品物リストは残されていないため、本稿ではそれらの資料に基づいてこの展覧会の特徴を指摘してみたい。開催地となったのは上野で、展示内容別に2箇所の会場が設置された。出品総数は約1400点で、「震災記念物」が中心であった。第一会場の東京自治会館では、「震災記念物」を中心に、図表も展示された。また、第二会場の池之端観月橋際では、「建築物」や「生産資料」が展示された。個々の展示物の詳しい配置場所は不明である。以下、出品募集ポスターのデザインと内容と新聞記事から、主催者側の意図と結果的にどのような展示内容となったのかを比較検討してみたい。

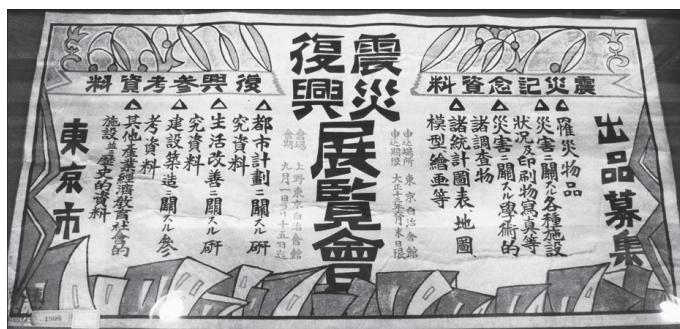


図1 震災復興展覧会（1924年）ポスター（復興記念館蔵）

出品募集ポスター（図1）はこれまでの募集ポスターに比べて凝ったデザインとなっており、この展覧会の性格をよく表している。形状は、横長の長方形（30×60cm）で、上部には植物、下部には幾何学的にデフォルメされたビル群、左右両端には幾何学模様が描かれ、ダークグリーン陰影がコントラストとなり立体感が強調されている。当時流行した「モダン」文化の影響を受けたデザインとなっているといえよう。中央には、縦書きで「震災復興展覧会」と見出しが書かれ、左右両端にはそれぞれ「出品募集」、主催者の「東京市」の名称が書かれている。募集内容として、右側に「震災記念資料」、左側に「復興参考資料」が記載されている。ここでは、主催者側が、展覧会を「震災資料」と「復興資料」という2つのカテゴリーで構成しようとしていたことがわかる。この展覧会の終了後、東京震災記念事業協会が出品物の蒐集を行ったことは先に述べたが、その募集対象となっていたのは、「震災記念物品」と「震災記念絵画資料」の2種であった。このことから震災直後の当時、協会側では「復興資料」が蒐集品として明確に意識されていなかったことがわかる。出品物の申し込み場所は、展覧会の会場にもなった上野の東京自治会館、申込期限は、1924（大正13）年6月末、開催期間は、9月1日から15日までと記載されている。『被服廠跡』によると、展覧会は「大好評」となり、当初9月15日までの予定が30日までに延長されている。

募集内容は以下のように分類されていた。まず、①「震災記念資料」には、a「罹災ノ物品」、b「災害ニ関スル各種施設状況及印刷物写真等」、c「災害ニ関スル学術的諸調査物」、d「諸統計図表地図模型絵画等」、の四種類が挙げられている。②「復興参考資料」には、a「都市計画ニ関スル研究資料」、b「生活改善ニ関スル研究資料」、c「建設築造ニ関スル参考資料」、d「其他産業経済教育社会的施設並歴史的資料」、⁽³⁹⁾の四種類が挙げられている。一般の人々が出品対象といえるのは、①-a「罹

災ノ物品」のみで、その他は、「統計図表」「研究資料」などが挙げられるなど、①②の категорияと
もに、官庁や研究機関などの学術団体が出品対象となっていると考えられる。

次に、実際の展示内容と、一般の人々の関心がどこにあったのかを新聞記事の内容に基づいて検討
してみたい。この展覧会を報じた新聞記事の見出しは、「開会する震災展」「血濡れの服や旋風に裂け
た樹木を並べて」となっている。「血濡れ」といった生々しい表現が使用されており、震災後一年し
か経過していない一般の人々の情念に訴えかける記事内容となっていることがわかる。記事には、出
品物について、「当時を偲ぶに相応しいが、只あの非常の場合の事とて、記念品を残すという余裕が
なかつたものか、一般の出品者は至つて少い」と書かれている。出品募集ポスター内容のとおり、主
催者である東京市の意図が反映された出品傾向となったことがわかる。

また、記事には出品物の内容が17種類記載されている。そのうち、13種類は被災物であり、「被
服廠跡の旋風に裂かれた四五尺の樹木」「相生町四の六佐久間守二（六つ）君が被服廠跡で奇跡的に
助かった時着ていた火穴だらけの着物」「大血痕だらけの警官の服」「焼けトタンの引掛かった焼け立
ち木」など、内容が具体的に記載されている。ここでも震災の悲惨さを示す情動的な表現が多用され
ていることがわかる。その他は、「鉄道省出品の地震計」、「シンシナタ市の地下鉄道工事の写真」「復
興局の統計表」「各地の新聞」となっている。以上の、写真・統計表・新聞は複数出品されていたと
思われるが、⁽⁴⁰⁾個数や具体的な内容は記載されておらず、不明である。

以上から、この展覧会では、「復興」を展示で表現したいという東京市の意図とは対照的に、震災
の悲惨さ、すなわち「被害」を強調する生々しい「震災記念資料」が中心となっていたことがわか
る。「復興」を示す統計表や写真の個数が不明なので、実際には多数の「復興参考資料」が展示され
ていた可能性もあるが、少なくとも新聞記事からは一般の関心が「復興」よりも「被害」にあったと
いえよう。この記事の次に、「今日の市中」の見出しの記事があり、当日、「府市追弔会」が被服廠跡
で午前9時から開催されること、そして、「各区に互り、神社、寺院其他に於て追弔の式や講演会、
展覧会等の催しあり」と記載されている。他に資料が残されていないので詳細は不明だが、震災記念
日に各地で震災関連の展覧会が開催されていたことがわかる。

② 帝都復興展覧会（1929年）

この展覧会は、1929（昭和4）年9月、帝都復興事業の完成を目前に、東京市政調査会⁽⁴¹⁾が主催、東
京市および復興局が後援し、日比谷公園内に新設された東京市政会館⁽⁴²⁾の竣工記念展覧会として開催さ
れた。震災復興展覧会（1924年）以降、震災記念日前後の時期に百貨店などで震災に関する資料や
写真の小規模な展覧会⁽⁴³⁾はたびたび開催されていたが、帝都復興展覧会⁽⁴⁴⁾はこれまでで最大規模の「震
災」と「復興」をテーマにした展覧会であった。

この展覧会については、東京市政調査会が発行している『都市問題』（1930年1月号）が帝都復興
展覧会の特集号となっており、趣旨や展示内容が詳細に記載されているほか、コラムなどで観客の反
応などを知ることができる。同誌には、展示順の出品目録が掲載されており、出品物の内容を具体的
に知ることができる。他にも、出品物の大きさや数量など、より詳細な出品目録が2種類刊行されて
いる。⁽⁴⁴⁾また、その後の1930（昭和5）年3月に開催された帝都復興祭の終了後に刊行された『帝都復
興祭志』（1932年）には、出品者別の配置場所が明記された平面図⁽⁴⁵⁾（図2）が記載されている。以

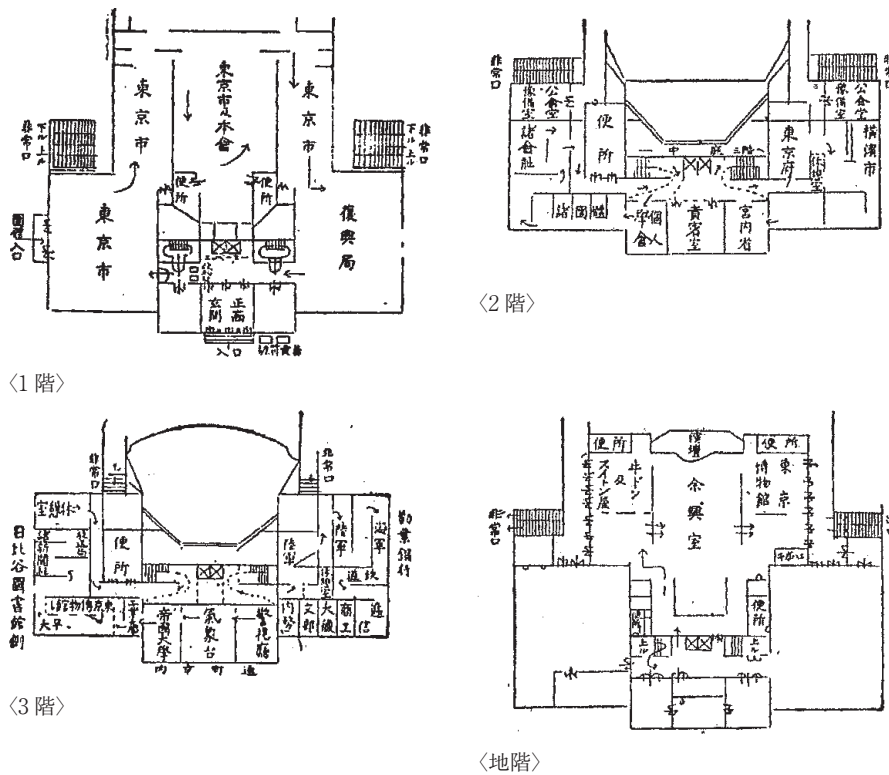


図2 帝都復興展覧会（1929年）の配置図（市政会館）『帝都復興祭誌』（1932），626頁。

下、これらの資料を参照して、この展覧会の特徴を検討していくことにする。

帝都復興展覧会の開催期間は、1929（昭和4）年10月19日から30日までの予定であったが、好評であったため会期が延長され11月10日までの23日間となった。出品者は、85箇所（個人、団体含む）、総点数は約7万点、最も多数出品したのは東京市で、約3600点であった。入場者数は1日平均約5千人、延べ11万数千人（114,736人）と、震災関連の展覧会では最大規模となった。入場者が最多となったのは11月3日で、13,303人であった。この展覧会の開催趣旨については、東京市政調査会から東京市への通知に下記のように簡潔に記載されている。⁽⁴⁶⁾

今秋十月予て日比谷公園内ニ新築中ノ本会々館落成ヲ期シ同会館ニ於テ帝都復興記念展覧会ヲ開催シ大震災当時ヲ記念スルト同時ニ復興事業進捗ノ現状ヲ弘宣シ以テ帝都将来ノ発展ニ資シ度ト存ジ別紙ノ通り企画相樹候ニ付右遂行ニ関シ何卒貴庁ノ御後援並御指導相蒙リ度此段及御依頼候敬具

この展覧会の目的は、下線部に記載されているとおり、「大震災当時ヲ記念」と同時に、「復興事業進捗ノ現状ヲ弘宣」し、「帝都将来ノ発展」のために資することであると明確に示されている。また、この展覧会の計画案である「帝都復興展覧会開催計画要綱」には、「(三) 展覧事項」として、「帝都復興ニ関スル一切ノ事項」（東京市政ニ関スルモノヲ含ム）と、「関東大震災ニ関スル一切ノ記録・絵画・写真・模型其ノ他ノ物件」（一般地震ニ関スルモノヲ含ム）と記載されている。つまり、この展覧会では、前述の震災復興展覧会（1924年）と同様、「震災」と「復興」を表現するという理念が意図されているのである。また、「(四) 展覧資料ノ蒐集」には、「大震災当時ノ救護関係⁽⁴⁷⁾

職員・帝都復興事業関係職員及資料ノ蒐集ニ付特殊ノ便宜ト経験ヲ有スル官公吏其他ノ特志家ヲ委員トシ之カ尽力ヲ乞フ予定」とあり、一般の人々ではなく、公務員を中心とする「帝都復興」関係者によって展示品を蒐集することが強調されており、「帝都復興」を担った側による展覧会という主催者側の意図があったことがわかる。

出品目録は同年8月15日までに、出品資料は同年8月末日までに取り纏め東京市文書課宛に送付された。蒐集品は、「震火災関係」「震火災救護関係」「復興及復旧関係」「震災の教訓」「非常警備関係」「東京市政一般」「其ノ他本展覧会ニ出品適当ト認メタル事項」の七つの項目に分類されている⁽⁴⁸⁾。この分類は試案の段階と実施要綱で一部変更している。通知の段階は、①「帝都復興展覧会出品物類別目録作成基礎案」(1929年7月12日)、実施段階は、②「帝都復興展覧会出品ノ件 出品資料選択事項」(1929年8月2日)に記載されている。この2つの段階を比較してみると、①の段階では「復興」については、「復興及復旧」の「第一種 復興」の項目となっていたが、②の段階では「復興及復旧関係」に「帝都復興事業」の項目が新たに設けられている。また、①の段階では入っていなかった東京市政についての項目が、②の段階では「東京市政一般」として新たに設けられている。つまり、実施段階では、震災後の「帝都復興」事業と、復興を推進する主体としての「東京市政」がより強調されるようになってきているということである。

展示品は市政会館の全体(1階, 2階, 3階, 地階)に出品者順に配置された。配置順はそれぞれ下記の通りである(矢印は展示動線)。

- 1階：東京市→東京市→東京市・東京市政調査会→東京市→復興局
- 2階：東京博物館→横浜市→宮内省→個人・学会→諸団体→諸会社
- 3階：内務大臣官房都市計画課→陸軍省→海軍省→鉄道省→逓信省→商工省→大蔵省→文部省→内務省→警視庁→气象台→帝国大学→東京博物館→大学→諸新聞社→放送局
- 地下：東京市, 東京震災記念事業協会, 東京博物館, 牛井及スイトン屋

出品者のほとんどが官庁等の公共団体、学術団体で占められていることがわかる。出品者85のうち、個人の出品は10名で27種のみである⁽⁴⁹⁾。以下、出品目録のデータをもとに出品物の特徴を検討してみたい⁽⁵⁰⁾。総出品物は1189種類、そのうち震災記念物は91種(7.7%)、復興資料は、1098種(92.3%)と、圧倒的に復興資料が多いことは明白である。また特徴的なのは、「復興資料」のうち、図表類が597種をしめていることである。「復興」を象徴する展示物として図表類が最も重視されていたことがわかる。また、出品者では、東京市が309種(約1000点)と最も多く、次に多く出品している復興局の102種の約3倍出品している。ちなみに、震災復興展覧会(1924年)に出品されたもので帝都復興展覧会にも出品されたことが確認できるものは存在しない。1930(昭和5)年3月に開催された帝都復興祭の天覧展示(全269種出品)にも出品されたものは、137種(50.9%)で、半分以上が継続して展示されたことがわかる。終了後、復興記念館に寄贈されたものは1359種中、577種(42.4%)、現在展示中の展示物では、457種中、85種(18.6%)が帝都復興展覧会の出品物であることが確認できた⁽⁵¹⁾。以上のデータから、開館時から現在までに帝都復興展覧会に出品された相当の数の展示物が失われていることがわかる。

観客の反応はどのようなものであったのかについては、『都市問題』誌上に観客の反応が記載されている。⁽⁵²⁾ おおむね好評であった様で、「ニュースとして将亦市政記事として開会の劈頭から既に各新聞紙の多大なる支持を受けた」「出品物の内容より陳列方に至る迄一々専門家の批評を仰いだが僥倖にも間然する処なしとの事であった」と当事者として評価している。観客からは、開会から閉会に至るまでの間に46通の投書があったという。内容は、展覧会の開設を感謝するもの、内容が充実していたことの評価、会期の延長を求める意見や、展示物の「永久保存」を求める意見などである。なかには展示物の「左書右書の統一に付是正の足らなかった」点などを指摘する意見もあったが、基本的に展覧会を高く評価する意見がほとんどであった。⁽⁵³⁾ また、「復興展を観た人々のことば」と題したコラムには17件の意見が紹介されている。⁽⁵⁴⁾ 基本的に「まことによい催し」といった展覧会を評価する意見がほとんどである。ここで注目したいのは、徳永柳洲の絵画について言及した以下の意見である(署名なし)。

徳永柳洲画伯の筆には泣かされました。彼の画は教育資料とし又市民の軽薄な最近の思想を反省自重せしめる善導資料として是非市民万衆の日夕目に触れる場所へ永久保存として提掲されたいと思ふ

この投書者には、徳永の震災絵画は、「市民の軽薄な最近の思想を反省自重せしめる善導資料」として受け止められていることがわかる。すなわち、前章で指摘した震災後の風潮の特徴の一つである「軽佻浮薄」批判、すなわち「モダン」文化批判が帝都復興展覧会においても存在していたのである。また、このコラムでは、その他にもう一名(伊藤文四郎)が徳永の絵画に言及している。先の引用ほど明確に「モダン」文化を批判している訳ではないが、「私共に対する追憶自省の好資料と固く信じます」と書かれていることから、やはり同様の意識を表現しているといえよう。また、「しんさいのときをおもゑばはたらかにやいられぬ」といった意見もみられ、震災の教訓を「勤労」の価値に見出す意識があったことがわかる。このような意見も「軽佻浮薄」(モダン文化)批判に通じる一面をもった意識といえよう。

その他、意見として興味深いのは、出品物のうち、図表、図面、写真、模型などを展覧会終了後も保存すべきであるという意見が多いことである(4件)。執筆者は、「係記」として投書文のあとに、復興展の主要出品物は東京震災記念堂に保管されること(正確には復興記念館)、日本統計普及協会から1930(昭和5)年2月に刊行されることを付記している。これが『帝都復興事業大観』である。同書には帝都復興事業に関する図表および写真が318種掲載されているが、そのうち帝都復興展覧会の出品物と同一(もしくはほぼ同一のもの)は40種(12.5%)掲載されている。⁽⁵⁵⁾ 記録として残すにあたって、かなり修正、変更、追加、削除されていたことがわかる。展示された図表類は、各種統計、グラフ類や、説明の文章や絵図を効果的に活用して「帝都復興」事業の成果を可視化している。各種統計やグラフ類は、カラフルに彩色されるなど工夫を凝らして表現されていたが、それらが観客に強いインパクトを与えていたことが前述の投書からうかがえる。展示物の53.9%を占めた図表類は、「帝都復興」が科学的かつ合理的に、すなわち「近代」的に遂行されたことを印象付けることに効果的だったと思われる。



図3 帝都復興展覧會（1929年）ポスター（東京市政會館蔵）

復興した近代（モダン）都市の姿を鮮やかに表現しているといえよう。もう1点は、黒色の背景にオレンジ色のタイトル（帝都復興展覧會）、中央には歯車をモチーフにした東京市のマークを配置、その内部には復興した都市が描かれている。それに重なるように、灰色で梯子の途中から下にみえる都市を指差している労働者が配置されているデザインとなっている。下部には主催・後援者の名称が黄色で書かれている。労働者や歯車のモチーフから当時の時代状況がうかがえるなど、こちらも非常に「モダン」なデザインのポスターとなっており、「軽佻浮薄」を批判する意識とは異なる当時の社会意識の一端が表現されているといえよう。

③ 天覧展示（1930年）

帝都復興展覧會の終了後、1930（昭和5）年3月に、「帝都復興」事業の完成を祝う帝都復興祭が開催された⁽⁵⁶⁾。その際、同月26日の帝都復興完成式典に先立って、24日には「帝都復興」の現状を視察することを目的とした天皇の巡幸が行われ、復興した帝都の姿を「御展望」し、震災・復興関係の各種資料および施設内部の設備を視察した⁽⁵⁷⁾。この展示は、正式には「天覧帝都復興記念展覧會」という名称であるが、本稿では便宜的に「天覧展示」と呼ぶことにする。



- 〈天覧展示会場〉
- ①東京府立工藝学校
 - ↓
 - ②震災記念堂
 - ↓
 - ③東京市立千代田尋常小学校
 - ↓
 - ④東京市立築地病院

図4 帝都復興祭（1930年）の巡幸路 『帝都復興祭志』（1932年）を元に筆者が作成

この展覧會がどのようなイメージで宣伝されたのかについては、東京市政調査會に保管されている帝都復興展覧會のポスター2点（図3）から知ることができる。そのうち1点は、一本の木が生えている丘から復興した帝都を見下ろす構図のポスターである。緑色の木の葉と丘、黄色から赤色のグラデーションで描かれた空、黄色のモダンなビル群、そして、中央やや上部には会期と会場名が赤色で描かれており、

天皇の「御立寄箇所」は、「九段坂上の御展望所」、「東京府立工藝学校」、「上野恩師公園」、「隅田公園」、「震災記念堂」、「東京市立千代田尋常小学校」、「東京市立築地病院」の7箇所であった。「御立寄箇所」のうち、展示が行われたのは、a:「東京府立工藝学校」、b:「震災記念堂」、c:「東京市立千代田尋常小学校」、d:「東京市立築地病院」の4箇所である（図4）。展示品の種類の選考、配置場所については、復興局、東京府、東京市の協議により決定された。出品

物は、帝都復興展覧会時のものを「厳選」し、新たに加えられたものも含まれていた。出品物は出品者別に配置され、東京市の出品物は府立工芸学校および築地病院、復興局と東京市の一部は市立千代田小学校に展示された。これらは巡幸が終了した後に一般公開されている。以下、4箇所の天覧展示を検討していきたい。

a：東京府立工芸学校

同校は、「九段坂上の御展望所」の次の視察地となり、当日、同校では事前に選ばれた400名の一般人の他、各官庁職員、中等学校職員、生徒代表約1000人が校門で天皇を迎え、午前10時34分に天皇が到着すると、東京府内務部長の大場鑑次郎が先導し、拝謁室で当時の首相山本権兵衛ほか、復興関係者に拝謁した後、復興参考品室で復興関係写真、統計図、学校模型を観覧し、各教室を巡覧⁽⁵⁸⁾した。ここでは、復興関連の図表を中心に写真、模型が展示された。展示物の配置場所については記載されておらず、不明である。展示物の総計は103点で、内容別の内訳は以下のとおりである。

まず、図表は42点で、そのうち学校関連が23点、復興関連は18点、被害関連は1点である。写真は52点で、学校関連が29点、復興関連が23点である。模型は9点で、学校関係が3点、復興関係は6点であった⁽⁵⁹⁾。学校関連では、会場となった東京府立工芸学校をはじめ、各種府立学校の平面図や現況写真を中心に、「大震災前後十三年間ノ比較一覧」(図表)では震災前後の学校数や児童数、経常費が記載されるなど、学校の復興状況が図表と写真で表現されている。復興関連では、帝都復興展覧会時と同様、震災前後の「生産額」や「交通」を比較して復興の様子を示す図表や、「街路網図」など復興事業の成果を示す図表が中心となっている。被害関連は、「震災罹災者」(図表)のみで、この会場の展示では、ほぼ全面的に「復興」が表現されていたことがわかる。これらのうち、復興記念館の収藏品リストに記載されているのは、「震災前後ノ東京府人口」「震災前後ノ物価ト賃金」(ともに図表)⁽⁶⁰⁾の2点のみである。

b：震災記念堂

竣工してまもない「震災記念堂」では、納骨堂の両側に震災当時の記念物を中心に図表や絵画が展示された⁽⁶¹⁾。天覧展示当日は、本所区区議会議員、神仏各宗派代表者などが「震災記念」堂前で天皇を迎えた。午前11時49分に天皇が到着すると、東京市助役の広瀬久忠が先導し、堂内祭壇前で黙禱した。東京市長の堀切善次郎が記念堂の建設経緯を述べた後、展示を観覧した。天皇が「感慨深いと深げに拝し奉つた」展示物として、震災記念物である「午前十一時五十八分の電気時計」「丸善書店焼跡より掘り出されたる洋書」、外国の新聞、特に「ニューヨークトリビューン紙」の「日本を救へ」という見出しの記事が挙げられている。これらは、外国の新聞以外、復興記念館開館後の収藏品リストには記載されておらず、必ずしも特別扱いされてはいなかったことがわかる。

「震災記念堂」の展示物は、他の会場とは異なり、震災関連(被害・救護)を表現した記念物がほとんどであることが特徴である。展示物の総数は141点、配置は、広間に絵画14点、壁面に81点、ケース内46点である(図5)。内容別の内訳は、絵画35点、図表18点、写真34点、ポスター7点、新聞1点、記念物40点、書籍6点である。これらは、地震に関する学術的な図表(「東京有感地震年次変化」など)18点と、「記念事業のポスター」2点以外はすべて震災関連の展示物で

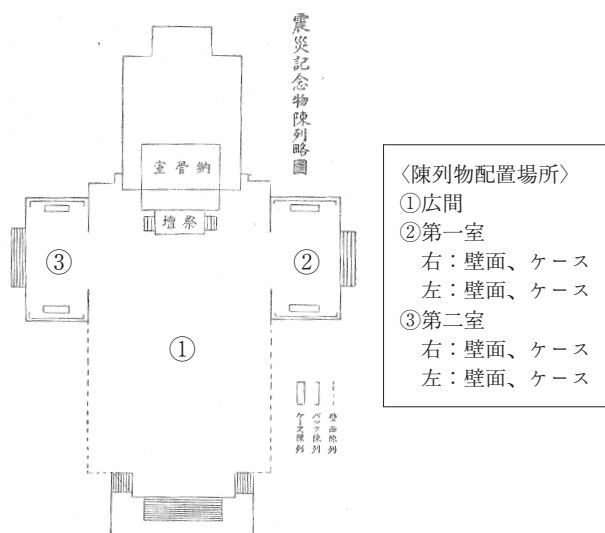


図5 天覧展示時の震災記念堂陳列物配置
『帝都復興祭志』(1932), 441頁, を元に筆者が作成

(85.8%), 天覧展示のなかで、「震災記念堂」が「震災の記憶」を表現する場として位置づけられていたことがわかる。これらのうち、復興記念館收藏品リストに記載されているものは84点(59.5%)と、6割近くが記念館に寄贈されたことがわかる。ちなみに、現在も展示中のものは20点、慰霊堂収蔵庫に保管されているものは5点である(図表のみ確認済み)。なお、天皇が展示品を閲覧し終わる時間は、震災が起こった時刻である「午前十一時五十八分」に設定され、一同が黙禱するという演出がそのことをより効果的に示したと思われる。

c: 東京市立千代田尋常小学校

同校では、普通教室5室を天覧展示の会場とし、壁面に各種復興事業の写真、図表、模型などを展示した。当日は、東京市主事と技師422名が「アーチより校門玄関まで清砂は清々しく敷詰め」て、天皇を迎えた。⁽⁶²⁾ この会場については、展示室の写真が4枚掲載されており、写真、図表、展示ケースが整然と配置されていたことがわかる。⁽⁶³⁾

展示品総数は65種で、展示物の内容は、図表は37種、写真18種、模型10種で、ここでは絵画と記念物は展示されていない。図表のうち、震災関連は6種、復興関連は31種、で、東京府立工芸学校より震災関連の展示物が多少多いが、基本的には復興関連が中心の展示構成となっていることがわかる。復興関連では、復興公園(7種)、橋梁(6種)、小学校(4種)、中央卸売市場(3種)の平面図や写真など、復興事業の成果を具体的に示す施設が多数展示されていることが特徴といえよう。この会場の展示物のうち、復興記念館開館後の收藏品リストに記載されているのは33種(50.7%)で「震災記念堂」よりは少ないものの、半数以上が寄贈されたことがわかる。ちなみに、現在も展示中のものは5種、慰霊堂収蔵庫に保管されているものは3種(図表のみ確認)である。

d: 東京市立築地病院

築地病院では、三階の講堂を「御座所」、屋上を「御展望所」とし、天覧展示の会場とした。「御座所」には、「築地病院図面」「魚市場説明図」「東京港湾説明図」、同室東側壁面には「市設社会事業分布図」が展示された(すべて図表類)。また、「御展望所」の東側の机左側には「市設魚市場模型」が配置された。ここで展示された図表および模型はいずれも病院、市場、港湾と築地にゆかりのある対象であり、この会場の特徴となっていることがわかる。築地病院に展示されたこれらの図表は、復興記念館の收藏品リストでは確認できないので、寄贈されなかったようである。

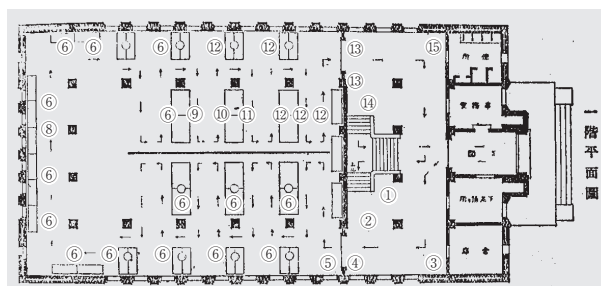
④ 復興記念館(1931年)

帝都復興展覧会の終了後、あらためて記念資料の募集を行い、本所公会堂に集められた蒐集資料

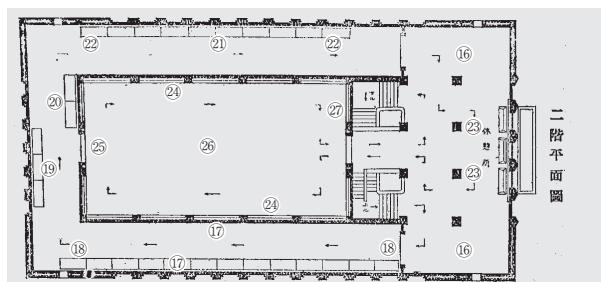
は、1931（昭和6）年7月4日の皇后の巡啓に際して取り急ぎ「仮陳列」を行ったが、その後、配置作業が完全に終了し、同年8月1日に開館した。『被服廠跡』によれば、2016点（1359種）の蒐集資料は、すべて展示することは不可能であるため、「他日適当の時期に交互に陳列換を為して一般に公開する」ことになった。その後も蒐集品の寄贈が続き、收藏資料は増加していった。また、現在展示中（414種）のものと收藏庫に保管されているものを合わせても、『被服廠跡』のリストに記載されている数量よりかなり少ないので、何らかの形で收藏資料が廃棄や寄贈されたことがあったのではないかとと思われる。收藏資料の変遷については、慰霊堂保管資料に目録がいくつか残されているが、いずれも断片的な目録であるため、正確な変遷状況を把握することはできない。以下、復興記念館の展示内容とその変遷について、『被服廠跡』に記載された收藏物リストと現在の状況と比較して検討してみたい。

記念館の展示は、基本的に震災の発生後から「復興」へと、起きた出来事順に構成されている。つまり、1階で震災の痕跡を残す生々しい資料を通じて「震災」から「復興」までの過程を「追体験」し、2階では、図表や印刷物を通じて「復興事業」の全体像を学習する、という「物語」の中に「震災」の経験を位置づけ直すことが目指されていたといえる。復興記念館の展示は、各種団体の出品物である復興関係資料の展示を中心に、「公民教育」という啓蒙主義的な性格をもっていた帝都復興展覧会（1929年）に比べて、一般市民から出品・寄贈された資料が多数であることが重要な特徴となっている。開館時、実際に展示物がどのように配置されたのかについては、『被服廠跡』には記述されていないため不明であるが、慰霊堂收藏庫保管資料中のパンフレット「震災復興記念館案内」に、記念館の平面図（図6）および展示品配置の概要、および蒐集点数が記載されており、開館後間もない時期の配置を確認できる。同資料には、收藏資料の総数は3109点、そのうち震災関係2829点（陳列品1716点、在庫品1113点）、復興関係280点（陳列品122点、在庫品158点）と記載されている。この時点で、総数が『被服廠跡』に掲載されたリストの数値より1000点以上増加していること、また「震災関係」と「復興関係」の割合が大幅に変化していることがわかる。

記念館の趣旨と目的について、同パンフレットには、震災の「被害を記念する物品」「その状況を後世に伝ふべき絵画、写真、統計等」と、「帝都復興事業の資料」を展示していると書かれており、また、目的として「災害に済知る不断の準備と其予防知識を普及」し、「遭難死者の追弔を主とする記念堂」とともに「震災復興」の記念とすると書かれており、当初から構想にあった「慰霊」「防災」「展示」の要素、および「震災」「復興」の要素がすべて盛り込まれていることがわかる。展示物の配置は、種類別に「イロハ」順（27種類、以下、数字順に変換して表記）で平面図に配置順が記載され



① 1階平面図



② 2階平面図

図6 復興記念館陳列物配置平面図（1930年代中頃と推定）
「震災復興記念館案内」（慰霊堂收藏庫保管資料36-47）

ている。

それによると、入口左手の方から展示がはじまっており、現在とは展示の動線が逆方向であったことがわかる（2階も同様）。現在、展示物が配置されていない入口玄関付近にも、①「被害せる印刷機械類」や②「焼損せる倉庫鉄扉」などの大型の記念物が配置されている。展示物配置番号①～⑦、⑭・⑮が「被害」、⑧～⑬が「救助」（あわせて震災関係）、⑯～⑳が「復興」の展示物となっている。①～⑮までが1階、⑯以降が2階に配置されており、震災関係資料のうち、㉑「震災関係図表及写真」、㉒「震災の思出となる図書新聞の類」が2階に展示されているほかは、1階＝震災関係、2階＝復興関係の展示となっていることが明確で、基本的に震災→復興の順に構成されている。復興関係の図表は（㉓「復興関係図表」、㉔「帝都復興一覧図」）は、現在と同じ2階の清澄通側の回廊のほか、階段正面のスペースにも展示されており、現在より強調された配置であったことがわかる。

IV. 復興記念館開館後の変遷

これまでの分析をふまえて、以下で復興記念館収蔵資料の変遷について考察しておく。まず、記念館および収蔵物の転機になった出来事を整理し、⁽⁷²⁾記念館開館時（1931年）の所蔵物と、各種展覧会（震災復興展覧会1924年、帝都復興展覧会1930年、天覧展示1930年）の出品物、そして、現在、記念館展示中の資料および慰霊堂保管資料の一部（図表など）との比較検討を行うことにする。⁽⁷³⁾

開館後から戦前期には、前述のとおり寄贈が続き収蔵物は次第に増加していった。それに応じて何度か展示替えがあったと思われるが、詳細は不明である。収蔵物に大きな変化が訪れたのは、1945（昭和20）年、東京大空襲およびその後の空襲被災者のため、同愛病院の一部として接收された時である。この時、ほとんどの展示・収蔵品が慰霊堂に移動され、戦前に作成された目録・配置場所等の整合性が皆無に近い状態になった。1948（昭和23）年に接收解除された際に収蔵物は復興記念館に戻されたが、東京大空襲の慰霊施設を兼ねることになり、「震災記念堂」は「東京都慰霊堂」に改称された。この時点で、復興記念館の2階に戦災資料が追加され、それにともない展示できなくなった資料が慰霊堂収蔵庫に保管されることになった。これが現在、慰霊堂収蔵庫保管資料である。その後、1956（昭和31）年に復興記念館の一般公開が再開されるに伴い、展示物の照合作業が実施された。⁽⁷⁴⁾どの時点で収蔵物にどのような変化があったかについての解明は今後の課題であるが、現在までに慰霊堂の収蔵庫に保管されている展示物・収蔵物は、ともに大幅に減少したことがわかる。

戦後の慰霊堂および記念館の状態については、新聞報道から知ることができる。「荒れ果てた記念堂」（東京朝日新聞、1953年8月31日付、以下同新聞）、「復活する記念館」（1956年8月5日）という記事から戦後、両施設が著しく衰退していたことがわかる。また、戦災資料と合祀されたことについて、「これっぽっちか戦災資料」（1970年7月26日）の記事にあるように、震災資料に対して戦災の資料の少なさが問題視されている。大型の震災記念物は、長期間、屋外に放置されており、「震災資料露天でさびつく」（1973年6月21日）、「野ざらし震災展示物」（1973年7月7日）と、相次いで新聞紙上で問題にされたことで、その後、1977（昭和52）年に記念館の改装工事が実施され、1992（平成4）年には屋外展示物のリニューアル工事が実施されている。

次に、記念館開館時（1931年）から現在までの収蔵資料の変遷を確認しておきたい。開館時の収

蔵物は1359種（以下単位省略）で、記念物355、図表166、写真417、絵画127、模型15、その他279である。全体では、震災記念物355（26.1%）、復興資料1004（73.9%）である。これに対して、現在展示中のものは総数457、記念物164、図表35、写真46、絵画90、模型8、その他114、であり、全体では、震災記念物173（37.9%）と復興資料284（62.1%）となっていることがわかる。震災記念物は、1種類で多数（例えば、硝子の破片は1種類で十数個）存在することが多いので注意が必要だが、開館時と現在では復興資料の比率が15.4%低下していることが特筆すべきであろう。

各種展覧会の展示物と現在の収蔵物の関係について確認しておく。震災復興展覧会（1924年）は総出品数約1400点とされているが、現在、新聞記事に記載された17種しか確認できないこともあり、同展覧会の出品物で記念館開館時のリストに掲載されていることがわかっているのは、「焼けトタンの引掛かった焼け立ち木」（記念物）のみである（現在も記念館に展示中、展示場所：1階M1）。帝都復興展覧会（1929年）の出品物では、全体で1189種の展示物が出品され、全体では、震災記念物91（7.7%）と復興資料1098（92.3%）の割合となっている。天覧展示は、総出品数種269で、記念物39、図表83、写真60、絵画35、模型15、その他20、であり、全体では、震災記念物39（14.5%）と復興資料230（85.5%）の割合となっている。各展覧会の展示物のうち、現在まで残っているものは、帝都復興展覧会85、天覧展示25、記念館開館時158である。開館時1359であった総数が、現在457になっていることを含め、開館時からかなり変化していることがわかる。

現在の案内パンフレットである「復興記念館案内」（東京都慰霊協会）の「展示内容」説明には、記念館の目的が、「関東大震災の惨禍」を永く後世に伝え、「官民協力して焦土と化した東京を復興させた当時の大事業を永久に祈念」するためであると書かれているが、各階ごとの展示内容の説明には、1階は「主として震災被害資料」、2階は「中央を絵画室とし、当時摂政宮の昭和天皇陛下震災ご視察の図その他徳永柳洲画伯の筆による大油絵、田代二見氏の震災直後の写生油絵等を陳列してあります」と書かれており、注目すべき展示物が絵画であることが強調されるようになったことがわかる。周囲の回廊には、「震災復興資料等」が展示されていることに言及されてはいるが、「東京大空襲による戦災関係資料」、「阪神・淡路大震災の災害写真」を展示していることと並列して説明されており、2階が「復興」を表現する空間であるという位置づけが曖昧になっている。このことは、平面図では、「震災復興事業資料」は展示資料の7つのカテゴリーの一つとなっていることからわかる。開館時と比較して、現在は、「帝都復興」の意義があいまいになっているということが指摘できよう。⁽⁷⁵⁾

おわりに

Iでは、記念館と慰霊堂の成立過程について、建設案をめぐるさまざまな試行錯誤と、震災後の「復興」をめぐる社会意識との関連に着目して検討を行った。震災の悲惨さを象徴する被服廠跡に建設される震災記念建造物は、「防災」「慰霊」「展示」の要素を併せ持った施設とすることとなったが、後に主要な要素となる「復興」を表現する要素は盛り込まれておらず、遺骨の埋葬という「慰霊」の要素が「復興」を妨げる懸念が指摘されていた。事業主体は市民の要望を考慮した結果、東京市とは別組織である東京震災記念事業協会が担うことになるなど、震災直後、さまざまな要素が混在

する「震災の記憶」にどのような表現を与えるかをめぐって、要素としての「慰霊」と「復興」、主体としての「官」と「民」がせめぎあっていたことを指摘した。また、震災後の社会意識は、「帝都復興」事業にみられるような「近代」主義的な価値観と、禁酒運動や「モダン」文化批判などの「精神」主義的な価値観を融合していこうとする意識がみられ、そのような社会意識は震災記念建造物のあり方をめぐる試行錯誤にも影響を与えており、懸賞当選案の「モダン」なデザインが批判され、結果的に、東西文化、伝統と近代の融合を目指した伊東忠太の案が採用された。

Ⅱでは、震災資料の蒐集は、「震災記念堂」の建設計画当初から構想されており、震災関連展覧会の開催時に大々的に募集されていたこと、そして、東京市長の永田の主張に見られるように、「科学的」かつ「積極的」に蒐集が行われていたことを指摘した。また、「震災記念物」と「復興資料」の2分類による蒐集方針は当初から一貫していたわけではなく、明確になったのは帝都復興祭後の蒐集時であること、当初蒐集が思うように進まず、記念館開館時までに集まった蒐集物の約半数が帝都復興展覧会の出品物であるなど、同展覧会の影響が強かったことが確認できた。

Ⅲでは、出品物の一部が記念館に収蔵された震災関連展覧会（①震災復興展覧会：1924年、②帝都復興展覧会：1929年、③天覧展示：1930年）および、④復興記念館の開館時（1931年）の展示および出品物の特徴を検討した。震災一周年記念展覧会として開催された①では、主催者である東京市は出品物を「震災記念資料」と「復興参考資料」とに分類して構成しようとしていたが、東京震災記念事業協会側では「復興資料」を蒐集品として明確に意識していなかったことを指摘した。また、新聞報道では被害の悲惨さを強調する生々しい出品物が強調されるなど、一般の関心が「復興」より「被害」にあったと思われ、主催者側の「復興」を展示で表現するという意図とは対照的であった。「帝都復興」事業の完成を記念する展覧会として開催された②では、「震災」と「復興」がテーマであったが、「復興」を視覚的に表現した展示パネルが出品物の中心となっていたことや、出品者は一般の人々より、公共団体をはじめとする「帝都復興」を担った側が中心であった。また、ポスターは大変「モダン」なデザインであったが、当時の観客の反応の分析により、「軽佻浮薄」な風潮、すなわち「モダン」文化批判の意識も存在していたこと、そして、出品物の「永久保存」の要望が多かったことを受けて記念館が設置されることになった点を指摘した。③は帝都復興祭完成式典に先立って開催された天皇の観覧を目的とした展覧会であり、展示品が配置された「御立寄箇所」は、震災直後に天皇が震災の被害を視察した場所が中心で、同じ場所から復興を視察するという意義があった。各会場の展示物は、基本的に「復興」を表現する展示パネルや写真が中心であったが、「震災記念堂」だけは、震災記念物がほとんどであり、「震災の記憶」を象徴的に表現する場として位置づけられていたことを指摘した。④では、記念館の展示は、基本的に震災の発生後から「復興」へと、起きた出来事順に構成されており、帝都復興展覧会（1929年）に比べて、一般市民から出品・寄贈された資料が多数であることが重要な特徴であることを確認した上で、開館後のパンフレットに記載された説明文と展示物の配置が記載された平面図の分析から、現在では「復興」の要素の位置づけがあいまいになっていることを指摘した。

Ⅳでは、記念館収蔵物の変遷について、記念館および収蔵物の転機になった出来事を整理し、記念館開館時の収蔵物と各種展覧会の出品物、そして、現在、記念館展示中の資料及び慰霊堂保管資料の一部との比較検討を行った。帝都復興展覧会および天覧展示で展示物の中心となっていた図表をはじめ

めとする復興資料が、開館時から現在にかけて大幅に減少し、さらに、戦災資料や阪神・淡路大震災の資料が加わったことで、「復興」要素の位置づけが曖昧となり、記念館の性格を変容させたことを確認し、その原因は、記念館と慰霊堂が建設された時代状況および文脈が見失われてしまったことにあることを指摘した。

以上の考察をふまえ、本稿の結論を述べておくことにする。「震災の記憶」は、唯一の公的な記憶装置である記念館と慰霊堂の成立過程でさまざまな変遷を遂げた。当初、「防災」「慰霊」「展示」の要素を盛り込むことで記念建造物建設案が計画されたが、「帝都復興」事業の進展とともに「復興」の要素が強調され、その完成時の帝都復興展覧会および天覧展示において、「復興」はその中心となり、同時期に開館した復興記念館の展示もその影響を多分に受けつつも、震災の「被害」と「復興」のバランスを考慮した構成となった。また、震災後の社会意識には、「軽佻浮薄」を批判する精神主義と、「帝都復興」事業に象徴される近代主義的な価値観のせめぎ合いがみられ、記念館と慰霊堂の成立過程における試行錯誤にはその意識が表れていた。以上の点は、今後、関東大震災およびその後の復興期の社会の位置づけを再検討する際にポイントとなる視座であると考えられる。また、戦後、社会の大きな変化に加え、戦災の慰霊と展示施設を兼ねることになったことが重なり、両施設の成立時の時代状況および価値観が忘却され、特に「復興」の意味が見失われていったことは、両施設の意義および記念館の展示にとって決定的な変化であったといえる。

最後に、今後の課題として以下の点を指摘しておきたい。まず、慰霊堂収蔵庫保管資料のうち、未整理状態の資料（記念物が中心）については、今後も調査を行い、他の資料と同様、出品物目録と照合し、データベース化していく必要がある⁽⁷⁶⁾。また、震災と戦災の慰霊・展示の問題について、両方が合祀され、展示が不十分な状態で「折衷」されていることについては度々問題視されているが、震災体験者がほぼ皆無となりつつある現在、改めて本稿で明らかにした両施設の成立過程と展示の変遷をふまえた上で、戦後の慰霊と展示のあり方を検討していくことが必要である。朝鮮人・中国人虐殺の問題についても、両施設の成立過程および震災前後の社会意識との関連から再検討すべきと思われる。そして、慰霊堂と記念館に「震災の記憶」が集中していったことで地域の「震災の記憶」が忘却された問題について、慰霊のあり方を地域に即して検証していく必要がある⁽⁷⁷⁾。以上の課題に取り組むことで、関東大震災および復興期の特徴を再検討し、そして、1920-30年代および戦時期にどのような影響を与えたのかを明らかにすることで、新たな歴史像を模索していきたい⁽⁷⁸⁾。

※本論文は、朝日新聞文化財団文化財保護助成事業「東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料の整理・保存・データベース化推進プロジェクト」の成果の一部である。

※謝辞：本論文の作成にあたって、(財)東京都慰霊協会および東京都東部公園緑地事務所の皆様方にご協力をいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

注

- (1) 両施設は、関東大震災時、火災旋風により約3万8千人死者を出したことで震災の悲惨さを象徴する場所となった陸軍の被服廠跡地に、震災の慰霊と供養および展示施設として建設された。所在地は現在の墨田区横網町公園内、最寄駅は大江戸線の両国駅。東京都慰霊堂は、完成当時、「震災記念堂」という名称であ

- ったが、1951（昭和26）年に東京大空襲の慰霊施設を兼ねることになった際に、現在の名称に変更した。復興記念館との混同を避けるため、本論文では個々に区別が必要な場合を除いて、震災記念堂・東京都慰霊堂＝慰霊堂、復興記念館＝記念館、と略記することにする。
- (2) 山本の研究は、慰霊堂と記念館の成立過程や、帝都復興展覧会の特徴、記念館の展示物などについて、これまででもっとも詳細に分析している（山本、2006年）。山本は、記念館は「震災から復興へ」の物語に収斂するだけでなく、植民地や欧米人の死者名も記載された「遭難歿死者名簿」や中華民国の「弔霊鐘」が存在するなど、様々な「ゆらぎ」を含んだ空間として構成されていたことを指摘している（山本、2006年、16頁）。ただ、同論文は、震災資料については東京震災記念事業協会の事業報告書『被服廠跡』（1932年）と帝都復興展覧会を特集した『都市問題』（10巻1号、1930年）に掲載されたリストに依拠しており、帝都復興展覧会以外の展覧会との関連や、その後の記念館および展示物の変遷、慰霊堂収蔵庫保管資料については言及していない。その他、山本は、慰霊堂の戦災慰霊の問題についての論文（2001年、2005年）も発表している。
 - (3) 寺田は、記念館に展示された絵画は、摂政宮（後の昭和天皇）の視線を人々に感じさせるという意図が存在することを指摘している（寺田、2008年、186頁）。
 - (4) 神奈川大学の慰霊堂保管資料調査は、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の一環として写真資料の調査を実施し（2006年、第一次調査）、同プログラム終了後発足した同大学非文字資料研究センターの個別共同研究「関東大震災後の都市復興過程とそのデータベース化、並びに資料収集」において、大型展示パネルや記念物以外の資料調査を実施した（2008年～継続中、第二次調査）。調査した慰霊堂保管資料は、東京震災記念事業協会の内部資料、記念館開館後に寄贈された書籍類などが中心。調査の詳細は、北原（2007年）、拙稿（2009年）を参照。
 - (5) 朝日新聞文化財団・文化財助成事業「東京都慰霊堂保管・関東大震災関係資料の整理・保存・データベース化推進プロジェクト」（2009年10月～2011年3月終了予定）。神奈川大学の第二次調査の残りの未整理資料を主な対象とした事業。北原と筆者は継続して調査を担当している。
 - (6) 震災復興期の展覧会と社会意識に着目した研究として、佐藤（2009年）がある。佐藤は、各種の美術団体の震災復興展覧会を分析し、芸術家たちが公的な「帝都復興」の言説を巧みに読み替えていったことを指摘しているが、帝都復興展覧会など、震災そのものの展覧会や慰霊堂・記念館および震災資料については言及していない。
 - (7) 震災報道の叙述形式と国民化の問題については、成田（2003年、初出1996年）が指摘している。記憶と歴史研究の関係については、阿部ほか編（1999年）、「震災の記憶」と表現の問題については、笠原・寺田編（2009年）を参照。後者は、阪神・淡路大震災およびその記念施設である「人と防災未来センター」について、「震災の記憶」の表現のあり方をめぐって批判的に言及している。
 - (8) 近年、歴史学では、前述の成田の研究や、都市のデモクラシーの変容について（能川、2002年）など、震災後の社会の変容について再検討がなされているが、全体としては、従来の、大正期の「デモクラシー」が震災後に昭和期の「ファシズム」の時代へ転換していく契機となるという位置づけに代わる、新たな枠組みを形成するには至っていないように思われる。ちなみに、美術史では、震災後に今和次郎らのバラック装飾社や村山知義らのマヴォといった芸術家グループが多彩な活動を展開し、商業美術などいわゆる「モダン」な文化が流行したことで、つまり、震災を契機として従来の既成概念にとらわれない新しい表現が震災後に次々に登場したことが指摘されている（千葉、2009年）。一方、建築史では、震災以前から住宅改良運動が盛んになるなどモダンな住宅建築が発展していたが、震災の結果、同潤会アパートをはじめ、モダンな住宅が普及していく契機となったが、震災以前の可能性が停滞していった側面があったことも指摘されている（内田、2002年）。
 - (9) 「震災記念堂」という名称は、1930（昭和5）年2月の時点で決定したもので、それ以前は、「被服廠供養堂」をはじめいくつかの仮名称が使用されていた。本稿では特に区別する必要がない場合は「震災記念堂」と表記した。本章の記述は、『被服廠跡』（1932年）を中心に、適宜、関連資料を参考にした。同書か

- らの引用は、本文中に頁数を記載し、関連資料については注に記載した。
- (10) 震災資料を正式に蒐集することになったのはこの時点からである。
 - (11) 『官報』号外, 1923年9月12日. この「詔書」は以後刊行された震災関連出版物の巻頭にしばしば掲載されている(『帝都復興祭志』1932年ほか)。
 - (12) 越沢明(1991年)は、「帝都復興」事業の近代的な都市計画が非常に先駆性をもっていたことを評価している。
 - (13) 佐藤, 2009年, 25頁。
 - (14) 近藤士郎がさまざまな論者の「震災の教訓」をまとめたアンソロジーでは、「天譴論」が基調となっており, 当時の影響力の強さがうかがえる(近藤士郎編, 1924年)。
 - (15) 渡邊長男「被服廠惨害地始末意見書」(1923年10月, 渋沢史料館蔵, ファイル143-26, 『震災善後ニ付諸意見建白書 大正十二年』, 所収)。渋沢のもとにはその他にもさまざまな「帝都復興」案が寄せられている。
 - (16) 東京市原案の平面図は、『被服廠跡』(92頁)に掲載されている。
 - (17) 当時, 法隆寺をはじめ, 奈良朝の建築様式は日本建築の典型として注目を集めていた(鈴木, 2003年, 15-16頁)。
 - (18) 懸賞当選案のうち, 一等〜三等までの図案は『被服廠跡』に掲載されている(前掲書, 98-99頁)。また, 一等〜三等, 佳作, 選外の図案は記念館に展示されている。
 - (19) 伊東は, 歴史主義を否定する分離派建築会(モダニズム)と, 建築設計からの自立を目指す建築史研究会(文献実証主義)とのほごまに立っていた(鈴木, 2003年, 31頁)。
 - (20) 「純日本風」という表現は, 現在の慰霊堂解説パネルにも使用されている。
 - (21) この陳列室は, 1930(昭和5)年3月の天皇巡幸の際に使用された。なお, 翌年7月4日の皇后巡啓の際には復興記念館が使用されている。
 - (22) 「被服廠供養堂建立大勸進」(ポスター, 東京府内各宗寺院, 1926年3月, 慰霊堂収蔵庫保管資料37-25)。
 - (23) 伊東, 1930年, 466-472頁。
 - (24) 伊東, 前掲論文, 468頁。
 - (25) 「塔の相輪」については, 伊東, 前掲論文, 469頁, 妖怪や怪物をデザインしたことについての伊東の見解については, 伊東, 前掲論文, 472頁。
 - (26) 伊東, 前掲論文, 472頁。
 - (27) 鈴木, 2003年, 94-96頁。藤森, 1993年。藤森は同書で伊東の建築をアジア主義の文脈で検討している。
 - (28) 日本建築学会, 1997年, 1頁。
 - (29) 慰霊堂および記念館のデザインの特徴についての説明は, 日本建築学会, 前掲書の指摘を参考にした。『建築雑誌』(1931年8月号)に復興記念館の竣工記録が掲載されている。
 - (30) 現在の京都市美術館(京都市岡崎公園内)。本館の設計者は, 「震災記念堂」設計案懸賞で一等当選者の前田健二郎。1928(昭和3)年に京都で開催された昭和天皇即位の礼を記念して建設が計画された。
 - (31) 佐藤, 前掲論文, 27頁。
 - (32) 「展示」「展示物」「陳列物」「陳列」「展示品」「出品物」など, 資料によってさまざまな表記が混在しているが, 本稿では特に区別する必要がある場合を除いて, 「展示」「展示物」で統一した。
 - (33) 各区長, 町会宛依頼状「大震災記念物及絵画資料募集の件御依頼」と募集規定, 応募申込書, ポスターの内容が『被服廠跡』に掲載されている(同書, 214-220頁)。
 - (34) これらの絵画は, 一部展示場所が変更されたが, すべて現在まで継続して展示されている。絵画の陳列方法については, 明治神宮絵画館の様式を参考にしていたという(『被服廠跡』, 1932年, 218頁)。
 - (35) 蒐集品については, 巻末の資料リストを参照。

- (36) 帝都復興展覧会終了後の募集時より、復興記念館完成から『被服廠跡』刊行までの方が多数蒐集されていることになる。その理由はよくわからないが、帝都復興展覧会の開催により、震災資料についての社会的な認知度が高まったためかもしれない。
- (37) なお、このリストでは、「震災記念品」はさらに材質や状況に即して細かく分類されているが、当時の文脈がわかりにくく混乱をまねきかねないため、本稿では、「震災記念物」の分類に統一した。また、「復興資料」については、図表、絵画、写真、模型、それぞれ内容に応じて「震災関係」と「復興関係」に分類した。
- (38) 記念館2階展示ケース(C32)。現在、記念館の展示ケースには名称や番号は付けられていないため、本稿では便宜的に筆者が番号を設定した。
- (39) 震災復興展覧会ポスター（記念館展示中、注38参照）。
- (40) 震災復興展覧会の出品物のうち、「焼けトタンの引掛かった焼け立ち木」は現在も記念館に展示中である（展示場所：1階M1）。
- (41) 東京市政調査会は、1922（大正11）年に、当時、東京市長であった後藤新平が、ニューヨーク市政調査会をモデルに、地方自治および都市計画についての調査・研究を推進するために設置した機関。
- (42) 会場となった市政会館は、1925（大正14）年着工、1929（昭和4）年竣工。関東大震災後の設計であるということで、鉄筋コンクリート造で、耐震性が重視されている。設計者は復興記念館の設計担当者の一人、佐藤功一である。近代ゴシック様式の特徴である重厚かつ優美な外観となっており、外装のスクラッチタイルは復興記念館にも使用されている。1999（平成11）年、東京都景観条例に基づき、慰霊堂・記念館とともに「東京都選定歴史的建造物」に指定された。
- (43) 東京朝日新聞（1928年9月1日付）には、日本電報通信社主催「五周年記念 関東大震災写真展観」（会場：四谷新宿ほてい屋、6階、会期：9月5日まで、内容：日本電報通信社所蔵の写真200点余）の広告が掲載されている。
- (44) 『帝都復興展覧会出品目録』、『帝都復興展覧会出品目録 分類索引』（いずれも東京市政調査会編、1929年）。
- (45) 『帝都復興祭志』（1932年、626頁）。
- (46) 前掲書、618頁。
- (47) 前掲書、619頁。
- (48) 前掲書、619-622頁。
- (49) 『都市問題』（10巻1号、1930年、27-48頁）誌上の出品物目録を参照。以下、出品物についての分析は同目録を参考にし、必要に応じて注44の目録2種を参照した。
- (50) 以下、データの算出にあたっては、目録には出品物の点数がすべて正確に記載されているわけではないので、出品物の種類でカウントした。1種類の出品物で複数出品されているものについては、すべてが目録に記載されているわけではないため、ほぼ同じと考えられるもの、もしくは、一部同じものがあるものも含めて算出した。
- (51) 巻末の復興記念館展示中・関東大震災関係資料リストを参照。
- (52) 『都市問題』、前掲号、24頁。以下、観客の反応については同書から引用。
- (53) 東京日日新聞（10月24日付）は社説で「帝都復興展」と題して、この展覧会の意義を主張している。
- (54) 『都市問題』、前掲号、154頁。以下、観客の反応についてのコラムはこの頁から引用。
- (55) 図表は『帝都復興事業大観』に収録時に一部修正、変更、追加されている。帝都復興展覧会の出品物との照合はタイトルがほぼ同一のもののみをカウントした。
- (56) 帝都復興祭の記録として『帝都復興祭志』（東京市、1932年）が刊行されている。同書には、天覧展示の各展示会場の展示物リストが掲載されている。帝都復興記念祭については、基本的に同書を参考にした。
- (57) 「御立寄箇所」は、震災直後に天皇が震災の被害を視察した場所が中心となっており、その同じ場所から復興を視察するという意義があったと思われる。

- (58) 東京市, 前掲書, 424 頁.
- (59) 東京市, 前掲書, 425-427 頁.
- (60) 「震災前後ノ物価ト賃金」(図表)は, 現在, 慰霊堂収蔵庫に保管されている. ただし, そのものではなく, 同一の内容で復興記念館開館後に改めて作成されたものである.
- (61) 「震災記念堂」の展示物リストは, 東京市, 前掲書, 430-440 頁, に掲載されている.
- (62) 東京市, 前掲書, 461-462 頁.
- (63) 東京市, 前掲書, 470-471 頁.
- (64) 本稿Ⅱ章, 10 頁参照.
- (65) 慰霊堂収蔵庫のうち, 震災記念物は現在調査中である.
- (66) 慰霊堂保管資料中の展示物目録は, 『陳列品目録 第一号 一階ケース其他』, 『陳列品目録 第一号 二階ケース其他』(慰霊堂収蔵庫保管資料 34-2, 4, 1956 年)ほか 20 点程度存在するが, 現存しているのは収蔵資料の一部である(拙稿, 2009 年, 資料リスト参照). 現在に至るまで, 来館者向けの展示物目録や図録は作成されていない.
- (67) 山本, 前掲論文, 13 頁.
- (68) 山本, 前掲論文, 13 頁.
- (69) 記念館に収蔵された資料の個人・団体別出品(寄贈)・東京震災記念事業協会所蔵資料の割合は, 震災関係(個人 78.7%, 団体 18.2%, 協会 3.1%), 復興関係(個人 12.8%, 団体 50.7%, 協会 36.5%), 全体(43.3%, 35.7%, 21.0%)となっている. 山本, 前掲論文, 13 頁.
- (70) 「震災復興記念館案内」(慰霊堂保管資料 36-47). 作成年代が記載されていないが, 同資料が保管されていた 36 ケースには 1930 年前後の資料しか入っていないことから, 開館後(1931 年 8 月)間もない時期の資料と推定される. また, 蒐集品の数が『被服廠跡』よりかなり増加しており, 開館後ある程度は時間が経過していると思われる.
- (71) 復興資料の数値が大幅に異なるので, 誤記の可能性もある.
- (72) 記念館および収蔵物の転機になった出来事については, (株)ブレインファーム社が作成した報告書(「横網町公園 慰霊堂収蔵物調査報告書」, 1993 年, 東京都慰霊協会所蔵)に記述がある. 以下の記述は同資料に基づく.
- (73) 巻末の資料リストに基づいて算出.
- (74) 注(60)の展示物目録はこの時に作成された.
- (75) 慰霊堂収蔵庫保管資料のうち, 記念物は現在調査中のためカウントしていないが, 図表をはじめ, 大幅に減少していることは確かである. その経緯や理由については今後調査を実施し, 改めて検討したい.
- (76) 今回の成果をもとに, より完全な展示図録・配置図の作成に取り組む予定である.
- (77) 多数の避難民が溺死した吉原の弁天池跡(新吉原花園池)付近には, 震災十周年記念碑や震災死者を供養する観音像をはじめ, さまざまな慰霊物が密集しているが, そのあり方は分析されていない. また, 復興橋梁のひとつである新亀島橋のもとに並んで建てられている震災と戦災の慰霊碑(「大震火災遭難者追悼碑」「戦災遭難者慰霊碑」)は, 元は違う場所にあった慰霊碑が同じ場所にまとめられ, 現在の状態になったと思われるが, そのような地域の慰霊碑の成立・変遷過程の検証は今後の課題である.
- (78) 吉見俊哉編著, 2002 年, は 1930 年代を, リベラリズムからファシズムへの「暗転」とする理解の地平を突破することを課題として設定しており, 本稿と共通するが, 関東大震災および震災復興期の影響については言及されていない.

参考文献

- 『帝都復興展覧会出品目録』（1929）東京市政調査会編。
- 『帝都復興展覧会出品目録 分類索引』（1929）東京市政調査会編。
- 『帝都復興展覧会出品目録』『都市問題』10巻1号（1930）東京市政調査会。
- 『帝都復興事業大観』日本統計普及協会編（1930）東京市政調査会監修。
- 『帝都復興事業図表』（1930）東京市役所編。
- 『被服廠跡——東京震災記念事業協会事業報告』（1932）東京震災記念事業協会精算事務所編。
- 『帝都復興祭誌』（1932）東京市。
- 阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編（1999）『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』柏書房。
- 内田青蔵（2002）『消えたモダン東京』河出書房新社。
- 海野弘（2007）『モダン都市東京——日本の一九二〇年代』中公文庫（原著，1983）。
- 伊東忠太（1930）「震災記念堂」『科学知識』5月号。
- 笠原一人・寺田匡宏編（2009）『記憶表現論』昭和堂。
- 加藤雍太郎・中島宏・木暮亘男（2009）『横網町公園——東京都慰霊堂・復興記念館——』東京都建設局公園緑地部監修・東京公園文庫48，財団法人東京都公園協会。
- 北原糸子（2007）「関東大震災の写真（東京都慰霊堂保管）について」『歴史災害と都市——京都・東京を中心に』立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議ジョイントワークショップ。
- 越沢明（1991）『東京都市計画物語』日本経済評論社。
- 近藤士郎編（1924）『震災より得たる教訓』国民教育社。
- 佐藤美弥（2009）「メディアのなかの「復興」——関東大震災後の社会意識と展覧会——」『人民の歴史学』第178号。
- 鈴木博之編著（2003）『伊東忠太を知っていますか』王国社。
- 高野宏康（2009）「東京都慰霊堂保管・関東大震災関連資料について」『年報非文字資料研究』第5号，神奈川大学非文字資料研究センター。
- 千葉真智子（2009）「尖端生活の諸相と都市の中の商業美術」，岡崎美術博物館編『あら，尖端的ね。——大正末・昭和初期の都市文化と商業美術』岡崎美術博物館。
- 寺田匡宏（2008）「ミュージアム展示における自然災害の表現について——関東大震災「震災復興記念館」の事例」，岩崎信彦・田中泰雄・林勲男・村井雅清編『災害と共に生きる文化と教育——〈大震災〉からの伝言』昭和堂。
- 成田龍一（2003）「関東大震災のメタヒストリーのために」『近代都市空間の文化経験』岩波書店（初出，『思想』866号，1996）。
- 日本建築学会（1997）「東京都復興記念館の保存に関する要望書」。
- 能川泰治（2002）「戦間期における「帝都」東京のデモクラシーと文化」『日本史研究』475。
- 藤森照信（1993）『日本の近代建築（下）大正・昭和編』岩波書店。
- 山本唯人（2001）「「東京都慰霊堂」の現在——東京空襲と「戦災死没者慰霊制度」の創設」『歴史評論』No. 616。
- 山本唯人（2005）「「分断の政治」を超えて 東京大空襲・慰霊堂・靖国」『現代思想』8月号。
- 山本唯人（2006）「関東大震災の記念物・資料保存活動と「復興記念館」——震災後における「公論」の場の社会的構築と「災害展示」」『社会学雑誌』23，神戸大学社会学研究会。
- 吉見俊哉編著（2002）『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社。

復興記念館展示中・関東大震災関係資料リスト

◎凡例

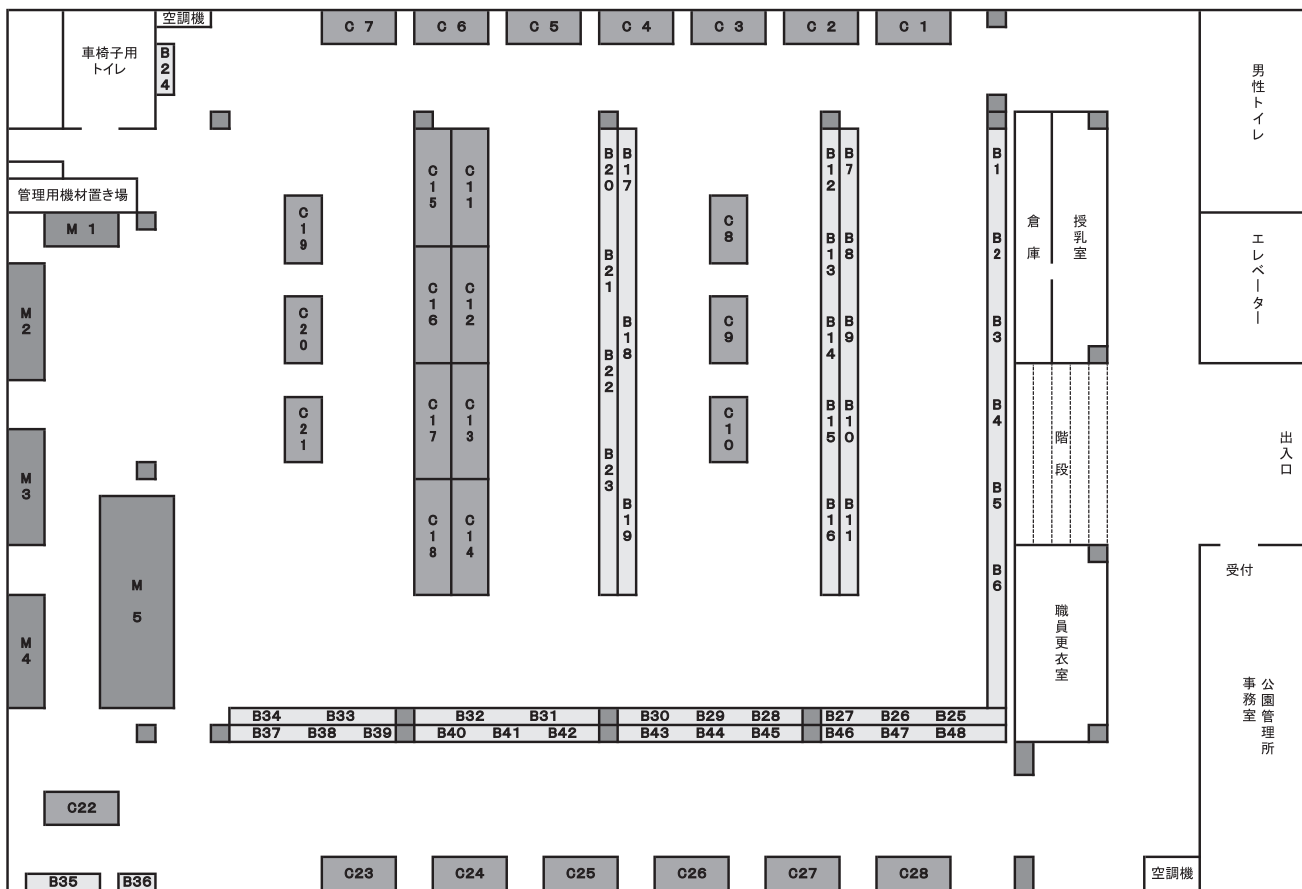
- ・この資料リストは、現在（2010年2月）、復興記念館に展示されているすべての関東大震災関係資料（戦災資料は対象外）に、東京都慰霊堂収蔵庫に保管されている資料のうち、展示パネルを加え、展示物が復興記念館に収蔵される前に出品された各種展覧会の情報を記載したものである。
- ・各種展覧会の表記は、震災＝震災復興展覧会（1924）、帝都＝帝都復興展覧会（1929）、天覧＝天覧帝都（1930）、を示している。また、開館＝復興記念館開館後、『被服廠跡』掲載リスト（1932）、現在＝現在展示中（2010）、保管＝現在慰霊堂収蔵庫保管中（2010）、を示している。△＝確定はできないが、同一の可能性のあるもの。図表類の場合、同タイトル・内容で作り直したもの。
- ・慰霊堂収蔵庫保管資料のうち、神奈川大学非文字資料研究センター調査時（2008-9年）に整理したものは、拙稿（2009年）に掲載。神奈川大学21世紀COEプログラム調査時（2006年）に整理した写真資料は含まれていない。震災記念物は未調査のため含まれていない。
- ・各項目の表記は以下のとおり。種＝出品者の種類（団＝団体、個＝個人）。階＝展示物が配置されている階、配置＝展示物の配置場所、数＝展示物の数、震／復＝資料区分（震災資料もしくは復興資料）、分類＝形態区分（記念物・印刷物・図表・写真・絵画・模型・彫刻・他）、種類＝内容区分（震災・避難・学術（地震研究類）・復興・書籍・児童の絵画や作文・ポスター・画報・新聞）。分類は『被服廠跡』の記述を参考に、煩雑なものは簡略化した。
- ・配置場所については次頁の図を参照。作図にあたって、「復興記念館展示品配置図」（横綱町公園管理所、2009年9月作成）を参考にした。
- ・資料名は、タイトルがついているもの、もしくはキャプションに明記されているものはそのまま記載した。説明が必要なものはカッコ内に筆者が補足した。
- ・資料の年代が特定できるものについては、備考欄に西暦表記で記載した。

展示物配置図

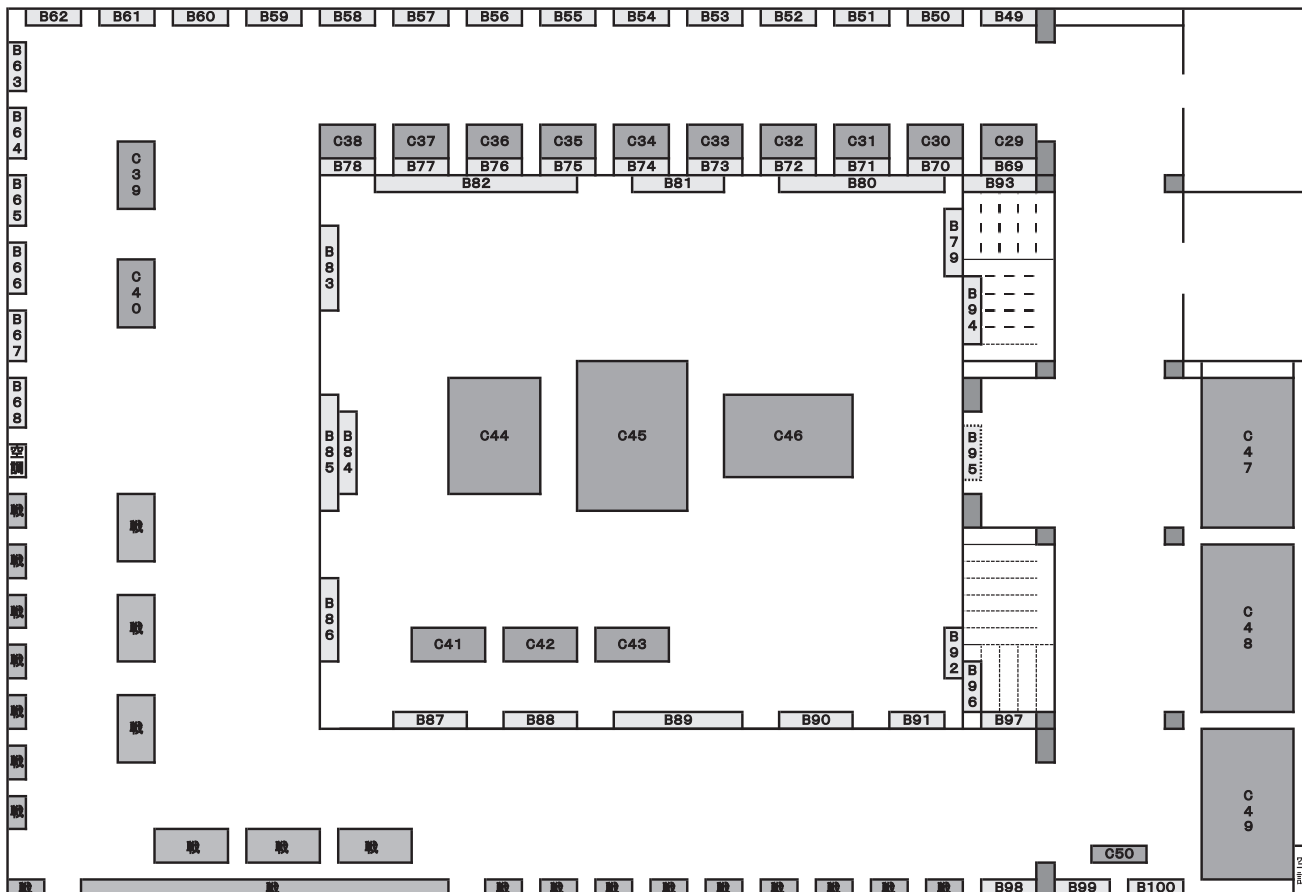
復興記念館（2010年2月現在）

1階

B ……展示ボード
 C ……展示ケース
 M ……展示物
 戦 ……戦災



2階



復興記念館展示中・関東大震災関係資料リスト

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災	帝都	天覧	開館	現在	保管	備 考
		1924	1929							1930	1932	2010	2010			
1	陶器		団	1	C1	9	震	記念	陶器					○		
2	貨幣		団	1	C2	2	震	記念	金属					○		
3	大学の記章		団	1	C2	1	震	記念	他					○		
4	釘類の熔塊		団	1	C2	6	震	記念	金属		△		△	○		
5	ねじ		団	1	C2	2	震	記念	金属					○		
6	置物(神仏像)仏像・面・埴輪・七福神		団	1	C3	8	震	記念	陶器					○		
7	硝子の溶塊など		団	1	C4	13	震	記念	硝子					○		
8	ビン・ガラス類の溶塊		団	1	C5	6	震	記念	硝子					○		
9	洋菓子の焼食品		団	1	C5	1	震	記念	他					○		箱1点
10	照明器具 手製ランプ・提灯		団	1	C5	3	震	記念	金属					○		
11	翡翠	佐藤禎次郎	個	1	C6	1	震	記念	石材					○		日本橋区村松町41で被災
12	数珠	板本源次郎	個	1	C6	1	震	記念	他					○		本所区林町で被災 珊瑚製
13	腰堤用水晶	川田準一郎	個	1	C6	1	震	記念	他				○	○		神田区西小川町で被災
14	印材の溶塊		団	1	C6	1	震	記念	石材					○	○	浅草区馬道で被災
15	象牙の彫刻	宇田川捨次郎	個	1	C6	1	震	記念	他			△		○	○	
16	日本刀(銘 兼定)	藤氏重司	個	1	C7	2	震	記念	金属					○	○	逸話記載
17	日本刀	廣田新五郎	個	1	C7	2	震	記念	金属					○	○	日本橋区浜町河原で被災
18	日本刀	江口芳兵衛	個	1	C7	2	震	記念	金属					○	○	神田区岩本町34で被災
19	日本刀(銘 播磨の守藤原輝廣)	岸村貞次郎	個	1	C7	4	震	記念	金属					○	○	
20	日本刀(銘 長船清光)	太田清十郎	個	1	C7	1	震	記念	金属					○	○	麴町区隼町21で被災
21	小柄	榊原繁太郎	個	1	C7	1	震	記念	金属					○	○	深川区鶴歩町で被災
22	小柄	池田銀三郎	個	1	C7	1	震	記念	金属					○	○	深川区鶴歩町で被災
23	小柄	江口芳兵衛	個	1	C7	1	震	記念	金属					○		
24	短刀(銘 信国)	野々宮幸吉	個	1	C7	1	震	記念	金属					○		本所須崎町で被災 逸話記載
25	短刀	八代目越前屋佐兵衛	個	1	C7	1	震	記念	金属					○	○	逸話記載 本所区向島須崎町で被災
26	太刀(銘 村正)	小川千本	個	1	C7	1	震	記念	金属					○		鋳2点あり 下各区仲御徒町で被災
27	計量器		団	1	C8	1	震	記念	金属					○		
28	古鏡	野々宮幸吉	個	1	C8	1	震	記念	金属				○	○	○	逸話記載 中央下に銘あり
29	扇風機		団	1	C8	1	震	記念	金属				○	○	○	
30	アイロン		団	1	C9	1	震	記念	金属					○	○	
31	消火噴霧器 手押しポンプ式		団	1	C9	1	震	記念	金属					○		
32	眼鏡類		団	1	C10	6	震	記念	硝子					○	○	
33	カメラ		団	1	C10	2	震	記念	金属					○		
34	双眼鏡		団	1	C10	1	震	記念	金属					○	○	
35	理容器具等		団	1	C10	8	震	記念	金属					○		
36	万年筆		団	1	C10	7	震	記念	金属					○		
37	時計		団	1	C10	5	震	記念	金属					○		
38	茶碗 五つ組	森清吾	個	1	C13	5	震	記念	陶器					○	○	芝区南佐久間町1丁目1番地で被災
39	石鍋	岡崎義孝	個	1	C13	1	震	記念	石材					○		本所区緑町3丁目43番地で被災
40	土瓶	島田勇吉	個	1	C13	1	震	記念	陶器					○	○	帝展系洋画家の池田永治作 梅花模様及び松模様 神田区一ツ橋通り7番地で被災
41	洋皿	浅見仙蔵	個	1	C13	1	震	記念	陶器					○	○	
42	花差	興津安三	個	1	C13	1	震	記念	陶器					○		芝区愛宕町2の14で被災
43	ペン皿	榊原繁太郎	個	1	C13	1	震	記念	陶器					○		麴町区上6番町で被災
44	紙幣	西野彦五郎	個	1	C13	1	震	記念	他					○		説明あり
45	鉄びんの溶塊		団	1	C13	1	震	記念	金属					○		
46	茶碗の熔着	興津安三	個	1	C13	1	震	記念	陶器					○		芝区愛宕町で被災
47	国語辞典	福田豫作	個	1	C13	1	震	記念	他					○	○	神田区表猿楽町12で被災
48	謡曲本の焼片	小島田忠友	個	1	C13	1	震	記念	他					○		千葉県君津群久留里町真勝寺まで飛散
49	焼け残った古銭 その他の物品		団	1	C13	1	震	記念	金属					○		
50	銅貨の焼塊	板本昇	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		
51	銅貨の焼塊	二宮常次郎	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		
52	銅貨の焼塊	板本銀次郎	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		
53	銅貨の焼塊	太田屋地所部	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		白銅製の5銭銅貨
54	銅貨の焼塊	柴田耕作	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		
55	天保銭	野々山幸吉 鈴木周蔵	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		
56	貨幣の熔解	石井李代子	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		浅草区田原町で発見
57	古銭	玉川喜一郎	個	1	C13	1	震	記念	金属					○	○	
58	古銭の焼塊	鈴木周蔵	個	1	C13	1	震	記念	金属					○	○	倉庫内で被災
59	手さげ金庫及びその他	泉幸子	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		
60	金庫型貯金箱	渡辺五郎	個	1	C13	1	震	記念	金属					○	○	本所区亀沢町で被災
61	金属の塊まり	松本正次	個	1	C13	1	震	記念	金属					○		本所区北新町92で被災
62	ガス口	早稲田大学	団	1	C13	1	震	記念	金属					○		ニコライ堂で使用
63	ボールト	早稲田大学	団	1	C13	1	震	記念	金属					○		ニコライ堂で使用

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災		帝都		天覧		開館		現在		保管	備 考		
		名 称	種							1924	1929	1930	1932	2010	2010								
64	釣燈籠		団	1	C13	1	震	記念	石材												神田区猿楽町で被災		
65	金属製水差し	早稲田大学	団	1	C14	1	震	記念	金属												ニコライ堂で被災		
66	バイオリン		団	1	C14	1	震	記念	木材								○	○					
67	マンドリン		団	1	C14	1	震	記念	木材								○	○					
68	猫の香炉	大和定平	個	1	C14	1	震	記念	陶器								○	○			京焼 本所区向島小梅町 154 で被災		
69	中国製の花びん	中島映一	個	1	C14	1	震	記念	陶器												本所区旧柳島町 17 天神橋角で被災		
70	植木小鉢	内藤愛次郎	個	1	C14	1	震	記念	陶器												本所区中ノ郷瓦町で被災		
71	挽茶々碗	太田清十郎	個	1	C14	1	震	記念	陶器									○	○		麹町区隼町で被災		
72	盃	興津安三	個	1	C14	1	震	記念	陶器												大正天皇御即位の節、上野公園で開催された東京市祝賀会で得たもの		
73	ぞうに茶碗	境富太郎	個	1	C14	1	震	記念	陶器												神田区淡路で被災		
74	瀬戸物類の熔解 きゅうす	榊原繁太郎	個	1	C14	1	震	記念	陶器												日本橋方面で蒐集		
75	瀬戸食器類	榊原繁太郎	個	1	C14	4	震	記念	陶器														
76	仏像	熊澤豊次郎	個	1	C15	12	震	記念	石材								○	○			日本橋区横山町付近で被災		
77	博多人形	川田準一郎	個	1	C15	2	震	記念	陶器												神田区西小川町 2 の 5 で被災		
78	高砂人形	興津安三	個	1	C15	2	震	記念	陶器												芝区愛宕町 2-14 で被災		
79	花びん	島田勇吉	個	1	C15	1	震	記念	陶器												日本美術院小川芋銭自画賛の模様入り 神田区一ツ橋通 7 番地で被災		
80	寒山拾得（常滑焼き）	中山孝一	個	1	C15	1	震	記念	陶器														
81	楽焼き	岡崎義孝	個	1	C15	1	震	記念	陶器														
82	寿老人置物	池田久楠	個	1	C15	1	震	記念	陶器									○	○		天保年間に作成		
83	石膏胸像	榊原繁太郎	個	1	C15	1	震	記念	石材												麹町区上六町で被災		
84	避難場所を書き入れた「カード」		団	1	C15	5	震	記念	他			○									5 箱		
85	案内所ちょうちん		団	1	C15	1	震	記念	避難			○									日本橋区馬喰町 3 丁目町会		
86	元禄美人像（青銅製）	加賀甚四郎	個	1	C16	1	震	記念	金属												本所区横綱町 2 の 11 で被災		
87	花器（銅製）	立原清香	個	1	C16	1	震	記念	金属												花道の清香古流家元が大正元年の作ったもの		
88	兜	島連太郎	個	1	C16	1	震	記念	金属										○	○	神田区美土代町で被災		
89	神仏用徳利	藤政倉之助	個	1	C16	1	震	記念	陶器												本所区旧番場町 1 で被災		
90	地藏面像	窪川旭	個	1	C16	1	震	記念	木材												浅草区龍宝寺で被災		
91	トランク	寺澤常三郎	個	1	C16	1	震	記念	形見												本所小梅町で被災		
92	バンド類	本館蔵	協	1	C16	1	震	記念	形見												被服廠跡で焼死した人々の遺品		
93	警察手帖		団	1	C16	1	震	記念	形見											○	○	被服廠跡で身元不明の焼死体から発見されたもの 当時、巡査部長であった河本愛三のもの	
94	水筒	大橋みよ	個	1	C16	1	震	記念	金属														
95	電気時計	東京科学博物館	団	1	C16	1	震	記念	金属			○	○	○	○						神田須田町の交差点で被災		
96	置時計	東京市役所	団	1	C16	1	震	記念	金属												被服廠跡で蒐集		
97	写真機	池田銀三郎	個		C16	1	震	記念	金属												深川区鶴歩町で被災		
98	顕微鏡	血脇守之助	個		C16	6	震	記念	金属												東京歯科医学専門学校 神田区三崎町で被災		
99	炊き出し用柄杓	宮内省	団	1	C16	2	震	記念	避難														
100	はし	本館蔵	協	1	C16		震	記念	避難											○	○	宮城県刈田郡七宿村の朝野力蔵から贈られたもの	
101	飯台	宮内省	団	1	C16	1	震	記念	木材														
102	掛札	東京科学博物館	団	1	C16	1	震	記念	金属											○	○		
103	軒蛇腹能面		団	1	C17	1	震	記念	木材														
104	欄間飾り		団	1	C17	1	震	記念	木材											○	○	舞台正面の装飾に使用	
105	帝国劇場装飾物の被害品（大理石の破片・出入口の飾り板）		団	1	C17	3	震	記念	石材											○	○		
106	シャンデリアの破片		団	1	C17	1	震	記念	金属											○	○		
107	支柱頭		団	1	C17	1	震	記念	金属														
108	シャンデリアの一部		団	1	C17	1	震	記念	金属											○	○		
109	柱の飾り		団	1	C17	1	震	記念	金属														
110	源森橋の名板		団	1	C18	1	震	記念	木材														
111	硝子の熔塊	赤堀吾作	個	1	C18	1	震	記念	硝子														
112	硝子類の熔塊	榊原繁太郎	個	1	C18	1	震	記念	硝子												○	○	日本橋方面で蒐集
113	大理石の破片	東京科学博物館	団	1	C18	6	震	記念	石材											○	○	横浜正金銀行正面壁面	
114	高麗狗	榊原繁太郎	個	1	C18	1	震	記念	石材												○	○	
115	シンガーミンシ機械	塚本キヨ子	個	1	C18	1	震	記念	金属													浅草区黒船町シンガー裁縫高等女学院で使用	
116	アイロン	永田千里	個	1	C18	1	震	記念	金属											○	○	勝田三郎商店焼跡より掘出したもの	
117	金盥	鈴木地三郎	個	1	C21	1	震	記念	金属													本所区松井町 1 の 26 で被災	
118	製菓用銅製平鍋	平見奈良市	個	1	C21	1	震	記念	金属													下谷区金杉上町 90 で被災	
119	鉄平鍋	榊原繁太郎	個	1	C21	1	震	記念	金属														
120	瀬戸引鍋	榊原繁太郎	個	1	C21	1	震	記念	陶器													神田区神保町で被災	
121	石油焔炉の破片	榊原繁太郎	個	1	C21	1	震	記念	金属													浅草区千束町方面で被災	

「震災の記憶」の変遷と展示

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災		天覧		開館		現在	保管	備 考
		名 称	種							1924	1929	1930	1932	2010	2010			
122	茶托	川田準一郎	個	1	C21	1	震	記念	金属					○	○			神田区西小川町で被災
123	被害消火栓	榊原繁太郎	個	1	C20	1	震	記念	金属		○				○			麹町区上6番町で被災
124	消火器の被害品	島連太郎	個	1	C20	1	震	記念	金属						○			神田区美土代町2の1三秀社で被災
125	消火器の被害品	榊原繁太郎	個	1	C20	1	震	記念	金属							○		本所区石原町で被災
126	英文タイプライター	中村證三	個	1	C19	1	震	記念	金属					○	○			日本橋区本銀町で被災
127	タイプライターの焼け残り	逓信省	団	1	C19	1	震	記念	金属		○					○		
128	タイプライター	榊原繁太郎	個	1	C19	1	震	記念	金属								○	京橋区新富町で被災
129	東海道根府川付近		団	1	C19	1	復	絵画	震災		○				○	○		
130	巻トタン樹木		団	1	M1	1	震	記念	旋風	○					○	○		
131	自転車の焼散	東京科学博物館	団	1	M2	1	震	記念	旋風		○				○	○		安田邸内で発見
132	木製車椅子		団	1	M3	1	震	記念	旋風								○	
133	金銭登録機	岡村栄治郎	個	1	M3	1	震	記念	金属							○		神田区の焼跡から発見
134	船用スクリュー		団	1	M4	1	震	記念	木材								○	
135	窓枠の被害品	東京科学博物館	団	1	M4	1	震	記念	金属		○				○	○		陸軍砲兵工廠で被災
136	金属の熔解物		団	1	M4	1	震	記念	金属							○	○	
137	誘導電動機		団	1	M5	1	震	記念	金属								○	
138	破壊した工業用酸素管	小野寺謙三郎	個	1	M5	1	震	記念	金属							○	○	本所区亀沢町藤井千代吉商店作業場内にて引火のため爆発したもの
139	非常用電および平釜	宮内省	団	1	M5	1	震	記念	金属		○						○	宮内省救護班が使用
140	鉄製ロール		団	1	M5	1	震	記念	金属								○	○
141	炊き出し釜	財団法人協調会	団	1	M5	1	震	記念	金属								○	○
142	橋梁装飾物の被害品	東京市土木局	団	1	M5	1	震	記念	石材							○	○	「りょうこくほし」 両国橋に明治378年架設以来、取り付けた親柱の装飾及び橋名板
143	胸像	東京歯科医学専門学校	団	1	M5	1	震	記念	石材								○	創立者の高山紀齊の胸像
144	金庫	伊藤辰治 山田嘉七	個	1	M5	1	震	記念	金属							○	○	
145	一馬力三相誘導電動機	東京工業大学	団	1	M5	1	震	記念	金属		○						○	浅草で被災
146	鉄製ロール	高橋幸太郎	個	1	M5	1	震	記念	金属								○	○
147	中華民国寄贈の梵鐘拓本		団	1	C22	1	震	他	協会								○	○
148	拾徳大土図		団	1	B9	1	震	絵画	他								○	○
149	寒山大土図		団	1	B9	1	復	絵画	他								○	○
150	鉄拐仙人図		団	1	B9	1	震	絵画	他									○
151	蝦蟇仙人図		団	1	B9	1	震	絵画	他									○
152	王一亭氏写真		団	1	B9	1	震	写真	他									○
153	交換台	東京科学博物館	団	1	C23	1	震	記念	金属							○	○	小田原郵便局に設置
154	電信鑽孔機	東京科学博物館	団	1	C23	1	震	記念	金属							○	○	東京中央電話局に設置
155	電話機用送話器	東京科学博物館	団	1	C23	1	震	記念	金属								○	大磯電話局で使用
156	磁石式加入者受話器	東京科学博物館	団	1	C23	1	震	記念	金属							○	○	東京中央電話局に設置
157	受話器	東京科学博物館	団	1	C23	1	震	記念	金属								○	小田原郵便局に設置
158	電話用度数計	東京科学博物館	団	1	C23	1	震	記念	金属							○	○	東京中央電話局に設置
159	電信鑄孔機		団	1	C23	1	震	記念	金属								○	
160	洋服上下	興津安三	個	1	C24	4	震	記念	避難								○	慶大生だった同氏がアメリカから同大被災者約100名に贈られた海軍服
161	作業服	東京市保健局	団	1	C24	2	震	記念	避難								○	アメリカから寄贈
162	カンテラ	東京市保健局	団	1	C24	1	震	記念	避難							○	○	アメリカから寄贈
163	枕	東京市保健局	団	1	C24	2	震	記念	避難								○	アメリカから寄贈
164	壺と吸口	本館蔵	協	1	C25	3	震	記念	避難								○	フランスから寄贈
165	フランス国旗	本館蔵	協	1	C25	1	震	記念	避難								○	
166	厨具(台所用具)	本館蔵	協	1	C25	1	震	記念	避難								○	オーストラリアから寄贈
167	ケッテル(大型)	東京市保健局	団	1	C26	1	震	記念	避難								○	アメリカから寄贈
168	大工道具	本館蔵	協	1	C26		震	記念	避難							○	○	フランスから寄贈
169	水入れ	東京市保健局	団	1	C26	1	震	記念	避難								○	○
170	アメリカ国内での義捐金募集ポスター	東京科学博物館	団	1	C27	2	復	印刷	ポスター		○						○	
171	母国震災救済事業記念写真帳		団	1	C27	2	震	印刷	画報								○	○
172	HELP JAPAN!		団	1	C27	1	復	印刷	ポスター									○
173	アメリカの諸新聞綴り	日米協会	団	1	C27	1	震	印刷	新聞		○						○	○
174	義援金募集スタンプ	古澤幸子	個	1	C27		震	印刷	他									
175	フランスから贈られた医療器具		団	1	C28	3	震	記念	避難								○	○

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災	帝都	天覧	開館	現在	保管	備 考
		1924	1929							1930	1932	2010	2010			
176	復興記念館について		団	1	B1	1	復	図表	協会					○		
177	復興記念館について		団	1	B1	1	復	図表	協会					○		
178	被服麻跡ノ分割図		団	1	B1	1	復	図表	協会				○	○		ヒロセ興業社 1932.3
179	震災記念堂関係写真		団	1	B1	1	復	図表	協会				○	○		
180	東京都慰霊堂（外観）		団	1	B1	1	復	写真	協会					○		
181	東京都慰霊堂（内部写真）		団	1	B1	1	復	写真	協会					○		
182	震災記念堂応募図案		団	1	B6	1	復	図表	協会				○	○		
183	大正十二年九月一日正午ヨリ夜中ニ至ル無線電信通信状況		団	1	B6	1	復	図表	震災					○		ヒロセ興業社 1932.3
184	築地交差点付近の惨状		団	1	B2	1	復	写真	震災					○		
185	上野駅の避難者		団	1	B2	1	復	写真	震災	○				○		
186	焼け跡の両国国技館		団	1	B2	1	復	写真	震災					○		
187	有楽町付近の猛火		団	1	B2	1	復	写真	震災					○		
188	関東威厳司令部からのピラ		団	1	B2	4	震	記念	避難					○		
189	関東大震災と地震被害		団	1	B3	1	復	図表	震災					○		
190	十一時五十八分突如大地震襲来ス		団	1	B3	1	復	写真	震災					○		
191	地震気象		団	1	B3	1	復	写真	震災				○	○		
192	東京帝国大学理学部地震学研究室観測 今村式二倍強震計記象		団	1	B3	1	復	図表	学術					○		
193	東京帝国大学理学部地震学教室資料		団	1	B3	1	復	図表	学術					○		
194	災害犠牲死者分布図		団	1	B4	1	復	図表	震災					○	○	東京農大造園学科 1958.8.21 参考『被服麻跡』
195	関東大震災 東京の消失地域 大正12年9月1日		団	1	B4	1	復	図表	震災					○		東京農大造園学科 1958.8.19 参考『被服麻跡』
196	京都市震火災発火地点及焼失地域図		団	1	B4	1	復	図表	震災			○	○	○		内山模型製図社
197	非局部大地震 大正大地震		団	1	B5	1	復	図表	学術				○	○		
198	非局部関東大地震地形変動		団	1	B5	1	復	図表	学術	○			○	○		
199	関東大地震当時並に関東主要地塊の傾斜運動		団	1	B5	1	復	図表	学術				○	○		内山模型製図社
200	地震はどうして起こるか		団	1	B5	1	復	図表	学術					○		
201	河野通勢先生筆 大正13年春陽会出品作品		団	1	C11	31	復	絵画	震災					○		
202	日比谷方面の火の手		団	1	B6	1	復	写真	震災					○		
203	震災直後のバラック		団	1	B6	1	復	写真	震災					○	○	
204	東京電燈（株）付近の家事		団	1	B6	1	復	写真	震災					○	○	
205	御茶ノ水付近の崖崩れ		団	1	B6	1	復	写真	震災					○		
206	復興途上（港区）		団	1	B6	1	復	写真	震災					○		
207	震災後の歌舞伎座付近		団	1	B6	1	復	写真	震災					○		
208	復興した九段坂		団	1	B6	1	復	写真	震災					○		
209	猛火に包まれた帝国劇場	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○	○	
210	日本橋宝町付近の出火状況	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
211	空から見た東京の火事	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
212	田端駅の避難者	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○	○	
213	東京駅前交番の消息札	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
214	二重橋前の大亀裂	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○	○	
215	震災直後のニコライ堂	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
216	悲惨を極めた本所方面の焼跡	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
217	東京大火災惨害（大正12年9月1日） 深川方面の被害惨状	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
218	震災直後の浅草仲見世	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
219	黒門町（上野）より見た神田方面震火の延焼	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○	○	
220	郵便貯金の非常払出	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
221	焼跡の新橋駅	東京朝日新聞社	団	1	B7	1	復	写真	震災					○		
222	アメリカで行われた義捐金募集のポスター		団	2	B49	2	復	印刷	ポスター		○			○		2枚を1つのボードに添付
223	海外諸国からの救援状況		団	2	B50	1	復	図表	震災			△	△	○		東京農大造園学科 1958.8
224	国内各地からの救援状況		団	2	B51	1	復	図表	震災				△	○		東京農大造園学科 1958.8.18
225	内外義捐金ノ使途		団	2	B52	1	復	図表	震災					○		ヒロセ興業社 1932.3
226	震災ニヨル市内ノ失業者		団	2	B53	1	復	図表	震災					○		ヒロセ興業社 1932.3
227	罹災者及其区域別統計図		団	2	B54	1	復	図表	震災					○		ヒロセ興業社 1932.3
228	震災後の帝都復興事業		団	2	B55	1	復	図表	復興					○		説明パネル
229	東京復興事業の内容		団	2	B56	1	復	図表	復興					○		内山模型製図社
230	東京復興事業の費用は		団	2	B57	1	復	図表	復興					○	○	内山模型製図社
231	東京市施行復興及復旧費ノ財源		団	2	B58	1	復	図表	復興					○	○	ヒロセ興業社 1932.3

「震災の記憶」の変遷と展示

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災					備考	
		名 称	種							1924	1929	1930	1932	現在		保管
232	東京市上水道ノ復興		団	2	B59	1	復	図表	復興					○		内山模型製図社
233	東京市街路ノ復興		団	2	B60	1	復	図表	復興					○		内山模型製図社
234	東京市公園ノ復興		団	2	B61	1	復	図表	復興		△			○		内山模型製図社
235	関東地方大地震年代表		団	2	B62 (上)	1	復	図表	学術				○	○		
236	安政二卯十月二日 大地震附類焼場所		団	2	B62 (下)	1	復	図表	学術					○		桐生市 泉田真太郎所蔵
237	西暦千三百年以後の大地震進行		団	2	B63	1	復	図表	学術		△	△	○	○		
238	西暦千八百五十三年以後の大地震進行		団	2	B64	1	復	図表	学術		△	△	○	○		
239	明治九年以後東京有感地震年次		団	2	B65	1	復	図表	学術		△		○	○		
240	丹後大地震を伴える地塊運動		団	2	B66	1	復	図表	学術				○	○		内山模型製図社
241	北伊豆大地震に伴える地塊運動		団	2	B67	1	復	図表	学術				○	○		内山模型製図社
242	北伊豆大地震の被害		団	2	B68	1	復	写真	震災				○	○		
243 ↓ 252	大震災後復興した都心の風景画	田代二見	個	2	B69 -78	10	復	絵画	復興				○	○		駒形橋 永代橋 聖橋 浜町公園の春 清洲橋 隅田公園の夏 隅田公園の冬 銀座通り 晩秋の昭和通 復興を望む
253	業	柴田正重	個	2	B79	1	復	彫刻					○	○		第11回帝国美術院展(1930)第3部 に出展後、作者より寄贈
254 ↓ 277	震災直後風景油絵	田代二見	個	2	B80	24	復	絵画	震災		○		○	○		駿河台付近 浅草公園雷門 牛ヶ淵公 園の避難者 築地教会跡 御茶の水附 近 本郷座の残骸 ニコライのタム 本所横綱町跡安田邸焼跡 駿河台附近 より小川町附近を望む 湯島台一望 日本橋通り3丁目附近 築地附近 吉 原江戸町附近 吉原仲之町 黒門町よ り湯島台を望む 神橋より鎌倉河岸を 望む 京橋明石町外人邸宅跡天主教 教会附近 京橋明石町附近キリスト教会 跡 麴町区上6番町 築地教会跡 京 橋通り 水道橋附近より駿河台を望む 旅籠町より湯島台を望む 30間堀を 距て采女町方面を望む
278	大震災記念	有島生馬	個	2	B81	1	復	絵画	震災					○		安田善次郎寄贈「大震災の印象を部 分的に描写せるものなり」
279 ↓ 302	震災直後風景油絵	田代二見	個	2	B82	24	復	絵画	震災		○		○	○		吾妻橋サッポロビール会社 小川町附 近一望 隅田川より本所方面一望 深 川方面一望 組橋付近より竹橋方面を 望む 上野駅跡 京橋明石河岸 聖路 加病院その1 日本橋交差点白木屋焼 跡正面 淡路町附近 隅田川より浅草 公園を望む ニコライ教会跡 神田橋 より旅籠町を望む 京橋明石町天主教 教会跡正面 明石町通り 紅梅町附近 大橋邸より大橋図書館を望む 京橋出 雲町外堀方面より京橋方面 上野広小 路松坂屋跡附近 神田神保町英和女学 校跡 上野公園避難の一部 聖路加病 院その2 お茶の水高師跡 日本橋北 詰より江戸橋を望む北は魚河岸
303	上野池の端病院御慰問の皇后陛下	徳永柳洲	個	2	B83	1	復	絵画	震災		○		○	○		
304	麴町五番町御巡視摂政宮殿下	徳永柳洲	個	2	B84	1	復	絵画	震災		○		○	○		
305	詔書		団	2	B85	1	復	他			○	○	○	○		解説あり
306	御心を悩ませられる摂政宮殿下			2	B86	1	復	絵画	震災					○		解説あり
307	本郷元より見たお茶の水付近	徳永柳洲	個	2	B87	1	復	絵画	震災		○		○	○		右脇に徳永柳洲略歴あり
308	当夜の永代橋	徳永柳洲	個	2	B88	1	復	絵画	震災		○	○	○	○		
309	上野公園より見たる灰燼の帝都	徳永柳洲	個	2	B89	1	復	絵画	震災		○		○	○		
310	宮城前避難バラック	徳永柳洲	個	2	B90	1	復	絵画	震災		○		○	○		
311	軍隊の炊出作業	徳永柳洲	個	2	B91	1	復	絵画	震災		○	○	○	○		
312	横浜の全滅	徳永柳洲	個	2	B92	1	復	絵画	震災		○		○	○		
313	赤十字の活動	(徳永柳洲)	個	-	B93	1	復	絵画	復興		○	○	○	○		階段途中の壁面に展示
314	軍隊の疾病者救護	(徳永柳洲)	個	-	B94	1	復	絵画	復興		○		○	○		階段途中の壁面に展示 解説パネルあ り
315	春日町より水道橋を望む	五姓田芳柳	個	-	B95	1	復	絵画	復興					○		
316	ニコライ堂を望む	徳永柳洲	個	-	B96	1	復	絵画	復興		○	○	○	○		階段途中の壁面に展示
317	自警団	(徳永柳洲)	個	-	B97	1	復	絵画	復興		○	○	○	○		階段途中の壁面に展示 解説パネルあ り
318	大震災状況絵画			2	C41	10	復	絵画	震災					○		タイトル・解説記載
319	東京市阪本尋常小学校絵		個	2	C42	11	復	絵画	震災					○		福井鎮吉氏表装寄贈「大震災災第四 週年九月一日」
320	クレヨン画			2	C43	12	復	絵画	震災					○		
321	帝都復興展覧会出品模型 第一号幹線昭和通の一部模型	復興局	団	2	C44	1	復	模型	復興		○	○	○	○		齋藤模型製作所(前内山模型製図社模 型部)
322	帝都復興展覧会出品模型 東京市五千分の一模型(焼失した都心部)	東京市政調 査会	団	2	C45	1	復	模型	復興				○	○		島津製作所標本部 凡例あり
323	帝都復興展覧会出品模型 隅田公園付近(台東区・墨田区)	復興局	団	2	C46	1	復	模型	復興		○	○	○	○		齋藤模型製作所(前内山模型製図社模 型部)
324	帝都復興展覧会出品模型 第二号幹線九段坂付近(靖国神社前)	復興局	団	2	C47	1	復	模型	復興		○	○	○	○		齋藤模型製作所(前内山模型製図社模 型部)
325	帝都復興展覧会出品模型 第七号幹線九重洲橋付近(東京駅前)	復興局	団	2	C48	1	復	模型	復興		○	○	○	○		齋藤模型製作所(前内山模型製図社模 型部)

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災	帝都	天覧	開館	現在	保管	備 考
		1924	1929							1930	1932	2010	2010			
326	帝都復興展覧会出品模型 小名木川筋改修状況(江東区)	復興局	団	2	C49	1	復	模型	復興		○	○	○	○		齋藤模型製作所(前内山模型製図社模型部)
327	南関東地方における地震震央震度別立体分布模型	東京都 電通	団	2	C50	1	復	模型	学術					○		解説あり データ提供: 科学技術庁防災科学技術センター
328	震災直後のポスターと新聞記事		団	2	B98	3	震	印刷	ポスター 新聞					○		「九月一日 ゆるむ心のねじを巻け 東京市」「九月一日 緩む心のねじをまけ 大正十四年九月一日 東京市」「各小学校に行かない方へ寛永寺の国民小学校へいらっしゃい」
329	大震災記念絵画	東京市阪本小学校	団	2	B98	15	復	印刷	ポスター					○		解説あり
330	翌日の悲嘆		個	2	B99	1	復	絵画	震災					○		解説あり
331	題名不詳		個	2	B100	1	復	絵画	震災					○		
332	案内所報 自大正十二年九月七日 至全年全月十七日	協調会情報案内所	団	2	C29	1	復							○		
333	震災日誌 大正十三年九月起	東京市神田区役所	団	2	C29	1	復	印刷	書籍				○	○		
334	災害日誌	日本橋区役所	団	2	C29	1	復							○		
335	東京市震災後復旧状況(続) 第二一号	東京市役所統計課	団	2	C29	1	復							○		
336	東京市ノ状況 東京市復興概要 第三十八号	東京市役所統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○		
337	東京市ノ状況 東京市ノ復旧概要 第五六号	東京市役所統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○		
338	東京市ノ状況 統計ヨリ見タル東京市ノ復興概況第八二号	東京市役所統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○		
339	東京市震災後ノ復旧状況	東京市役所統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍				○	○		
340	増補 大震災災と水問題 附 帝都復興計画と鑿泉私見		団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○		
341	震災災と法律問題 附 震災災関係諸法令	清水書店	団	2	C29	1	復	印刷	書籍				○	○		
342	震災に依る被害工場事情 第四報 秘	協調会情報部	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○		
343	震災に依る被害工場事情 第三報	協調会情報部	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
344	火災を起し易き薬品の格納法に関する注意書		団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
345	木造小学校建築耐震上ノ注意	震災予防評議会	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
346	家屋新築及修理に関する耐震構造上の注意書	震災予防評議会	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
347	臨時震災救護事務局嘱託協議会報告書		団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
348	災害情報 自乙第一号 至乙第四五	東京市統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
349	災害情報 自乙第一号 至甲第一〇〇号	東京市統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
350	災害情報 自甲第一〇一号 至甲一六七号	東京市統計課	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
351	乙班 東京府情報綴	東京博物館	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
352	乙班 外務省情報綴	東京博物館	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
353	乙班 統計綴	東京博物館	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
354	乙班 参考資料蒐集綴	東京博物館	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○	○	
355	東京市大震災火災ノ火勢並消防概況	警視庁消防部	団	2	C29	1	復	印刷	書籍					○		
356	日誌 大正十二年十二月十五日起	緑尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	書籍					○		
357	日誌 大正十三年二月二十六日起	緑尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	書籍					○		
358	日誌 自大正十二年九月五日 至全年十月廿八日	下谷区市立小学校長会	団	2	C30	1	復									
359	日誌 大正十二年度 九月以降	柳島尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	書籍					○		
360	日誌 大正十二年十一月一日起	緑尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	書籍					○		
361	当番日誌	緑尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	書籍					○		
362	(文集) 三学年	東京市立横川尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
363	(文集) 思ひ出 六女		団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
364	(文集) しんさいの思ひ出		団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
365	(文集) 九月一日の思ひ出		団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
366	(文集) 大震災遭難記 第一学年女一組	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童					○	○	
367	(文集) 大震災遭難記 普通科第一学年	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童					○	○	

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災	帝都	天覧	開館	現在	保管	備 考
		1924	1929							1930	1932	2010	2010			
368	(文集)大震災遭難記 専攻科第二学年	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
369	(文集)大震災遭難記 第一学年男一組	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
370	(文集)大震災遭難記 専攻科第一学年	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
371	(文集)大震災遭難記 第二学年女一組	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
372	(文集)大震災遭難記 普通科第二学年	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
373	(文集)大震災遭難記 第二学年男一組	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
374	努力週間日記 男子第二学年	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
375	努力週間日記 女子第二学年	東京市立京橋尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
376	努力週間	東京市立京橋高等小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童					○		
377	在学証明書	東京市明治尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	証明書				○			
378	震災直後の児童学席簿	東京市文海尋常小学校	団	2	C30	1	復	印刷	児童				○	○		
379	1. 国民科 教授資料 震災ニ関スルコト		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
380	2. 国民科 教授資料 救護ニ関スル事		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
381	3. 国民科 教授資料 復興事業		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
382	4. 国民科 教授資料 復興ニ関スルコト		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
383	国民科教授資料?? 分類		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
384	国民科教授資料 社会一般 評論之部		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
385	国民科教授資料 大震大火災ノ生シメテ哀談		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
386	国民科 教授資料 復興ニ関スルコト		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
387	国民科 教授資料 戒厳ニ関スルコト		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
388	国民科 教授資料 震災写真		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
389	国民科 教授資料 大震災諸相ニ対シテ 厳正ナル批判 政治的・道徳的・哲学的		団	2	C31	1	復	冊子	学校					○		
390	帝都復興ニ伴フ 学校配置意見 校舍建築ニ関スル希望	下谷区市立小学校長会	団	2	C31	1	復	印刷	書籍				○			
391	復活への犠牲 ふたばのかたみ	東京市二葉尋常小学校	団	2	C31	1	復	印刷	児童					○		
392	我々教育の復興	東京市月島第二尋常小学校	団	2	C31	1	復	印刷	書籍				○	○		
393	奉仕者出勤簿 大正十二年九月十二日起	下谷区市立小学校長会	団	2	C31	1	復	冊子	学校				○	○		
394	下谷区内(避難ノ本区児童 バラック居住児童他区ヨリ避難児童 収容児童)調査	下谷区市立小学校長会	団	2	C31	1	復	印刷	児童					○		
395	当時ノ教育情况	錦華尋常小学校	団	2	C31	1	復	印刷	書籍					○		
396	児童調査簿	京橋高等小学校	団	2	C31	1	復	冊子	児童				○	○		
397	下谷区小学校職員罹災調 御真影奉還調査	下谷区市立小学校長会	団	2	C31	1	復	印刷	学校					○		
398	出席簿		団	2	C31	1	復	冊子	児童				△	○		
399	帝都復興の歌募集	東京市役所	団	2	C32	1	復	印刷	ポスター				○	○		
400	募集	東京市役所	団	2	C32	1	復	印刷	ポスター					○		
401	震災復興展覧会	東京市	団	2	C32	1	復	印刷	ポスター					○		
402	震災復興展覧会	東京市	団	2	C32	1	復	印刷	ポスター					○		
403	(案内) 避難者相談所	静岡県	団	2	C33	1	復	印刷	書籍					○		
404	(案内) 謹告	東京府知事 宇佐美勝夫	団	2	C33	1	復	印刷	文書					○		
405	(封筒) 恩賜		団	2	C33	1	復	他						○		
406	東京日日新聞 号外	大阪毎日新聞社東京支店	団	2	C33	1	復	印刷	新聞					○		
407	神戸新聞 号外	神戸新聞社	団	2	C33	1	復	印刷	新聞					○		
408	鹿児島新聞 号外	鹿児島新聞社	団	2	C33	1	復	印刷	新聞					○		
409	鹿児島新聞 第三号外	鹿児島新聞社	団	2	C33	1	復	印刷	新聞					○		

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災 1924	帝都 1929	天覧 1930	開館 1932	現在 2010	保管 2010	備 考
		名 称	種													
410	福岡毎日新聞関門号外	福岡日日新聞 関門司支局	団	2	C33	1	復	印刷	新聞					○		
411	大阪毎日新聞	大阪毎日新聞社	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
412	大阪毎日新聞	大阪毎日新聞社	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
413	大阪毎日新聞	大阪毎日新聞社	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
414	神戸新聞	神戸新聞社	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
415	大阪朝日新聞	大阪朝日新聞社	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
416	大阪朝日新聞	大阪朝日新聞社	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
417	東京日日新聞	大阪毎日新聞社 東京支店	団	2	C34	1	復	印刷	新聞					○		
418	関東大震災画報		団	2	C35	1	復	印刷	画報				○	○		
419	国際画報	大正通信社	団	2	C35	1	復	印刷	画報				○	○		
420	江戸大地震出火場所附		団	2	C35	1	復	印刷	書籍					○		
421	大震災写真画報	大阪朝日新聞社	団	2	C35	1	復	印刷	画報				○	○		
422	サンデー毎日 帝都復興号 第二年 第四一号	毎日新聞社	団	2	C35	1	復	印刷	雑誌					○		
423	国際写真情報 関東大震災号	国際情報社	団	2	C35	1	復	印刷	雑誌					○		
424	下谷 車坂交差点付近		団	2	C36	1	復	写真	復興					○		
425	(倒壊した家屋)		団	2	C36	1	復	写真	震災					○		
426	馬車		団	2	C36	1	復	写真	震災					○		
427	神田 神田川筋		団	2	C36	1	復	写真	復興					○		
428	(倒壊した建物)		団	2	C36	1	復	写真	震災					○		
429	两国橋より本所国技館方面を望む	天正堂 土屋傳集 画堂 宇田川安高	個	2	C36	1	復	絵画	震災					○		
430	浅草公園十二階花屋敷付近の火の海象君の避難	尚美堂 田中良三	個	2	C36	1	復	絵画	震災					○		
431	本所石原方面大旋風之真景	浦野銀次郎 発行所 浦島堂画局	個	2	C36	1	復	絵画	震災					○		
432	日本橋より魚河岸及三越呉服店付近延焼	天正堂 土屋傳集 画堂 宇田川安高	個	2	C36	1	復	絵画	震災					○		
433	(バラック)			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
434	(停泊中の船)			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
435	巡回救護班 食を求むる人々			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
436	麴町 凱旋道路			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
437	神田 駿河台付近			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
438	(路上の人々)			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
439	麴町 文部省			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
440	麴町 市役所前			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
441	(路上の人々)			2	C37	1	復	写真	震災					○		大震災状況写真
442	大正大震災記	国民新聞記者 長井修吉編 大正震災記録編纂会	団	2	C38	1	復	印刷	書籍					○		
443	詩集 市民の歌へる 第4号	東京市編纂	団	2	C38	1	復	印刷	書籍				○	○		
444	寸鐵 震災俠勇美譚 第五卷第十一号	博文館	団	2	C38	1	復	印刷	雑誌				○	○		
445	横浜市震災記念館 記念帖	震災記念館 発行	団	2	C38	1	復	印刷	書籍					○		
446	大正14年頃の慰霊堂中正面	松本専吉	団	2	C38	1	復	写真	協会					○		
447	The GREAT EARTH QUAKE & FIRE in TOKYO & YOKOHAMA September 1.1923 関東震災画帖	Iida juji-kan	団	2	C38	1	復	印刷	洋書					○		
448	(文集) 九月一日の思ひ出 四女二		団	2	C38	1	復	印刷	児童					○		
449	大正十二年九月一日 大地震大火災 遭難百話全	定村國夫 多田屋書店	団	2	C38	1	復	印刷	書籍					○		
450	震災美談	中島司	団	2	C38	1	復						○	○		
451	十一時五十八分 一懸賞震災実話集一	刀禰館正雄 東京朝日新聞社	団	2	C38	1	復	印刷	書籍					○		
452	十一時五十八分	東京市役所 萬朝報社 共編 萬朝報社出版部	団	2	C38	1	復	印刷	書籍					○		

No	展 示 物 名	出品者/作者		階	配置	数	震/復	分類	種類	震災		帝都		天覧		開館	現在	保管	備 考	
		名 称	種							1924	1929	1930	1932	2010	2010					
453	震災記念堂模型	東京震災記念事業協会	団	2	C38	1	復	模型	復興					○	○					解説・文書添付 作者：中谷宏運「御礼のため、震災記念事業協会より天皇、皇后両陛下並びに皇太后陛下に献上」
454	震災直後の小学児童製作品		団	2	C39		復	他	児童								○			
455	大震災記念画帖			2	C40		復	絵画	震災								○			
456	(写真)			2	C40		復	写真	震災								○			
457	(スケッチ)		団	2	C40		復	絵画	震災								○			

東京都慰霊堂収蔵庫保管図表類

1	復興後ノ橋梁分布図		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
2	東京ノ地質分布図		団	-	収蔵	1	復	図表	学術		○						○			内山模型製図社 1932.4
3	復興計画防火地区			-	収蔵	1	復	図表	震災				△				○			1932.4
4	東京市罹災者ノ散布状況図		団	-	収蔵	1	復	図表	震災		○	△	○				○			ヒロセ興業社 1932.3
5	震災記念堂及附帯事業印刷物		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			
6	地下埋設物ノ整理図		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			ヒロセ興業社 1932.3
7	臨時收容バラック退去状況		団	-	収蔵	1	復	図表	震災								○			ヒロセ興業社 1932.4
8	震災前後ニ於ケル東京近郊ノ人口比較		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			ヒロセ興業社 1932.3
9	復興事業完成後ノ街路樹植栽網		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
10	東京ノ生立		団	-	収蔵	1	復	図表	学術								○			内山模型製図社 1932.4
11	震災ニ因ル本邦ノ損失		団	-	収蔵	1	復	図表	震災		○	○	○				○			ヒロセ興業社 1932.3
12	震災後ノ仮家屋 移動バラック		団	-	収蔵	1	復	図表	震災				△				○			ヒロセ興業社 1932.3
13	震災ニヨル被害建物ノ復興状況		団	-	収蔵	1	復	図表	復興		○		○				○			1932.3
14	復興局街路橋形式図 其一 其二		団	-	収蔵	1	復	図表	復興		○		○				○			
15	帝都復興計画東京市案一般図		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			1932.3
16	東京復興計画ノ過程 甲案 乙案		団	-	収蔵	1	復	図表	復興					○			○			
17	国施行帝都復興事業費各年度月別支出状況		団	-	収蔵	1	復	図表	復興		○		○				○			
18	教育施設ノ復興		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
19	東京市施設社会事業分布図		団	-	収蔵	1	復	図表	復興				△				○			1932.3
20	震災後ニ於ケル東京市ノ仮設建築物		団	-	収蔵	1	復	図表	震災			○	○				○			1932.3
21	復興事業ノ施行		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
22	大震災と電信		団	-	収蔵	1	復	図表	震災		○		○				○			1932.3
23	大震災後ニ於ケル郵便ノ復旧状況		団	-	収蔵	1	復	図表	震災								○			1932.3
24	罹災者救済施設網		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
25	東京復興計画ノ過程 基礎案 完成図		団	-	収蔵	1	復	図表	復興					○			○			内山模型製図社
26	復興計画土地区画整理(其ノ二)		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
27	罹災者ノ避難ト收容		団	-	収蔵	1	復	図表	震災								○			内山模型製図社 1932.4
28	復興後ノ卸売並小売市場分布図		団	-	収蔵	1	復	図表	復興				△	○			○			内山模型製図社 1932.4
29	東京市ノ対災組織ト救護ノ過程		団	-	収蔵	1	復	図表	震災								○			ヒロセ興業社 1932.3
30	東京市下水道ノ復興		団	-	収蔵	1	復	図表	復興								○			内山模型製図社 1932.4
31	震災前後ノ物価と賃銀 平均指数		団	-	収蔵	1	復	図表	前後		○		○				○			東京府
32	羽田地塊の急性運動によりて強震起る地震前にも著しき地塊運動あり		団	-	収蔵	1	復	図表	学術								○			内山模型製図社